Research on district deployment of the history of a modern Noh play which makes the Kanazawa Noh play meeting an example

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nishimura, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034783

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

KAKEN
2004
103
金沢大学

金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究

課題番号　１３６１０５０２

平成１３年度～平成１５年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（２））

研　究　成　果　報　告　書

平成１７年５月

研究代表者　西村　聡
（金沢大学文学部教授）

金沢大学附属図書館
0500-04189-X

KAKEN

金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究

課題番号　１３６１０５０２

平成１３年度～平成１５年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））

研　究　成　果　報　告　書

平成１７年５月

研究代表者　**西村　聡**
（金沢大学文学部教授）

目　次

はしがき　(3)

第一章　加賀宝生の伝統　(6)

第二章　近代能楽史料としての『三百年祭記事』二種　(8)

第三章　「金沢能楽会設立趣意」の出現を待ちながら　(14)

第四章　明治の能楽復興とその地方展開
　　－金沢能楽会設立趣意書から読み取れること－　(15)

第五章　「加賀宝生子ども塾」の試み　(26)

第六章　空から謡が降るということ　(27)

附篇　「金沢能楽会の百年」人名索引　(30)

附表　金沢能楽会の百年略年表　(73)

はしがき

本書は，平成１３年度から平成１５年度にわたって，科学研究費補助金「基盤研究（C）（２）」の交付を受けて実施した，「金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究」の研究成果報告書である。

【研究課題】金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究

【研究の目的】

能楽史研究の基本史料は，各種催しの番組である。本研究では金沢能楽会の定例能（その番組は収集済み）以外の催しの番組を，雑誌・新聞・古文書等から収集・復元して，定例能の番組と併せて，番組自体の量的把握を充実させ，資料整備の精度を上げることを第一の目的とする。第二にはそれらを利用して，金沢における近現代能楽史の流れをできるだけ網羅的かつ具体的に記述する必要があり，現在までにある程度実現したが，その過程で発見した問題をさらに掘り下げて考察し，また本研究を推進することで収集・復元できた資料を加えて分析をいっそう精密なものにする。第三に金沢能楽会の歴史が地方に展開する近現代能楽史の特異な事例であるのか，他地方にも共通するある程度普遍性の認められる事例なのかを見極めることを目的とする。第四に能楽師個々の歴史を追跡する。全国を網羅することは不可能であるが，金沢能楽会関係者及び金沢出身の能楽師たちの出自・芸系・資料を集めた，最終的には人名辞典の実質を備えた記述に到達したい。

本研究を推進することで，金沢における近現代能楽史を把握するための資料が飛躍的に整備され，精細な通史記述が可能になる。明治の博覧会・博物館や神宮教会，大正の震災や昭和の戦争の影響などを視点とすることで，社会背景との関連や全国的な傾向との比較が具体的に行える。金沢はそれ自体が変遷をたどるに十分な伝統と資料を備えた都市であるが，その金沢の近現代能楽史の特徴を解明することは，金沢という地方から照らして，近現代能楽史全体の新たな展望を呈示することにもなる。金沢から出て東京の能楽復興の中心的役割を担った旧藩主の前田斉泰やその後の能楽隆盛を支えた金沢出身の家元や人間国宝たち，金沢にとどまって活動を続けた勢力などの事蹟を追跡して，近現代能楽史の展開をダイナミックにとらえること，その裏付けとなる基礎作業を新聞・雑誌の調査に関係者への聞き取りも交え，詳細かつ生き生きとした証言で構成することに特色と意義があり，他の地方には少ない，地方から中央を動かすエネルギーの消長や伝統的都市の自意識とイメージ形成への利用の実態が浮かび上がると予想される。

従来の能楽史研究は扱う時代が中世・近世に偏っていたが，本研究では近現代を対象とする。また従来の近現代の能楽史研究は東京中心であったのに対して，本研究は金沢能楽会を事例とし，かつ問題ごとに全国の諸地方を視野に収める。全国の動向を把握することは容易でないが，その拠りどころとして各地の新聞を利用することが，倉田喜弘編『明治の能楽』『大正の能楽』の刊行によって可能になってきたし，金沢についても百年間の番組が集成され，そのように研究条件の整備が進んだ時期に研究を推進するという意義がある。地方能楽史の一例を示すにとどまらず，近現代能楽史像の更新に貢献すると位置づけ

られる。

【研究の経過】

《平成１３年度》

明治35年創刊の『能楽』の関係記事を調査して，大正10年までの地方の状況を東京のそれと継続的に対比する作業を開始した。また早稲田大学演劇博物館において能楽雑誌の収蔵分を調査し，このうち明治 42 年創刊の『能楽画報』の目次及び地方能楽欄の複写・収集を行った。年度中に復刻された『明治天皇紀』からは能楽関係記事を収集した。さらに，補助金交付以前から従事してきた金沢能楽会百年史の編纂が完成し，近現代能楽史の地方展開についての俯瞰的な見通しが得られた。これらの調査・研究の進展により，以下の知見が新たに得られた。明治の能楽復興は10年代の保護期と30年代の自立期の二つの山に分けられ，20年前後には演劇改良論議の影響を受けること。金沢には20年代に今様能狂言との確執から能楽師が結束する機会（石川県能楽会）が先行し，保護者が前面に出る金沢能楽会の設立がこれに続くこと。能楽は衰退からの復興，演劇は退廃からの改良，互いにライバル視し合ったが，共通の合い言葉は「高尚優美」であったこと。能楽復興の広がりを確認するのに各地の能楽会の設立趣意書が有効であること。その典型としての「金沢能楽会設立趣意」の諸本の把握と原態についての推定がほぼできたこと。

《平成１４年度》

前年度から継続している能楽雑誌の地方欄調査と新たに地方新聞の関連記事調査を行った。能楽雑誌については，『能楽』『能楽画報』に続いて，『謡曲界』の大正年間分を購入し，地方能楽の状況を東京でどう把握していたかが，資料的に解明できつつある。新聞記事に関しては，地元の北國新聞を中心に，昭和期に重点を置いた資料の収集を続けている。この作業はたんに番組の補充や能楽師の伝記的解明だけでなく，地方都市金沢のイメージ形成の過程をたどる上でも必要であり，全国的な傾向の把握を加えて，分析を進めることになる。これらの資料収集や調査を踏まえて，いくつかの論文や資料紹介を本年度も行った。具体的な成果をここで逐一数え上げることはしないが，この研究のキーワード「加賀宝生」の語の使用は，藩末期の隆盛を回顧して明治中期頃に行われるのが，文献上の早い例であると分かったこと，また昭和の戦後間もない頃に金沢市の記念文化財に指定される際に，その定義に関する当時の公式見解が示されていて，市の指定理由書が再発見できたこと，などが収穫であった。さらに「明治の能楽復興とその地方展開」と題する論文では，金沢能楽会の設立趣意書を読み解いて，その原態を推定した上で，発起人の顔触れから社会的背景を探り，趣意書の文体に見る金沢の事情と全国的な趨勢を浮かび上がらせた。

《平成１５年度》

引き続き能楽雑誌の地方欄の調査と地方新聞の関連記事の発掘を行い，新たに『能楽思潮』を入手して，昭和の戦後期資料の分析が容易になった。また地元紙の記事を整理して，「空から謡が降る街」のいわれとその変遷を明らかにした。能楽協会会員名簿を基に都道府県別の在住会員を比べると，人口比では石川県は全国２位に位置し，しかも三役が揃い，由緒ある舞台や装束が伝存することからして，現在も能楽の盛んな地域といってよいことが確認できた。しかし少子化・高齢化の影響も否定できず，伝統の継承という点では，「加賀宝生子ども塾」の試みにも注目している。一方，明治中期の能楽史料として，『金沢開

始三百年祭記事』『旧藩祖三百年祭記事』を紹介し，その価値を見定めることも行った。それぞれの祝典の余興に能楽が催されたことは従来も知られていたが，とくに前者については，番組の所在が他に見当たらず，この『記事』によって初めて演者・演目が明らかになった。前年度に解明した能楽復興期における新興富裕層の動向がさらに具体的に追跡できる資料である。後者については，番組自体は既知のものであるが，催しの詳細・全容が把握できたことで，日清戦争前後から高揚する「特枠」意識や移住した今様能狂言の来演など，近代能楽史の重要事項をこの行事にも確認し得ることが分かった。新聞・雑誌の記事に限らず，この種の行事記録の調査・収集が必要であり，かつ近代能楽史を照らす光源として有効であることが知られたのは，本研究にとって大きな収穫であった。

【研究組織】

研究代表者：西村　聡　（金沢大学文学部教授）

【交付決定額（配分額）】　（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１３年度	６００	０	６００
平成１４年度	５００	０	５００
平成１５年度	５００	０	５００
総　　計	１，６００	０	１，６００

【研究発表】

（１）学会誌等

・西村聡，「金沢能楽会設立趣意」の出現を待ちながら，新・能楽ジャーナル，6 号，2001 年 7 月 1 日。

・西村聡，明治の能楽復興とその地方展開－金沢能楽会設立趣意書から読み取れること－，文学第 3 巻第 5 号，2002 年 9 月 25 日。

・西村聡，近代能楽史料としての『三百年祭記事』二種，石川県史だより，43 号，2004 年 2 月 16 日。

・西村聡，「加賀宝生子ども塾」の試み，新・能楽ジャーナル，22 号，2004 年 3 月 1 日。

（２）口頭発表

・西村聡，加賀宝生の歩み，金沢能楽会設立百周年記念シンポジウム，2001 年 4 月 7 日。

・西村聡，明治の能楽復興と金沢，金沢大学国語国文学会，2001 年 10 月 6 日。

・西村聡，伝統文化の現状，島々，そして金沢，国際シンポジウム：グローバリズムとミクロネシアの伝統文化－伝統文化の保存と発展を求めて－，2002 年 3 月 26 日。

（３）出版物

・西村聡，加賀宝生の伝統，ふるさと石川歴史館，北國新聞社，2002 年 6 月 10 日。

・西村聡，空から謡が降ってくる，おもしろ金沢学，北國新聞社，2003 年 8 月 25 日。

第一章　加賀宝生の伝統

明治 30 年（1897）9 月上旬の『北國新聞』に，佐久間夢裡の聞き書き「波吉甚次郎氏を訪ふ」が 7 回にわたって連載されている。波吉といえば諸橋と並ぶ，金沢在住の加賀藩御手役者（藩が抱える専業の能役者）の雄であり，甚次郎は維新前後に名声を博した紅雪（宮門）の嫡子として，加賀宝生の旗手を自任するはずの人であった。

しかし甚次郎が金沢を離れて，この時すでに 10 年余りが経過していた。聞き書きは，甚次郎が亡父紅雪の 13 回忌に帰省した折に，東京からの視点で能楽談義に気炎を吐いたのを編集したとされる。

聞き書き中には 4 度，「加賀宝生」の語が見いだされる。管見では，維新後の文献上，今のところ最も早い使用例になる。その 1 例目は 13 代藩主前田斉泰の頃，金沢の能楽は全国に冠たる隆盛を誇り，斉泰が宝生流を好んだことから，「果ては加賀宝生とまで称られし程となりき」と述べ，波吉家に対する斉泰の恩顧を振り返る文脈に使用されている。

これによれば「加賀宝生」の呼称の成立は加賀藩末期，斉泰時代（治藩は 1822 － 1866）ということになる。確かに斉泰は歴代藩主の中で自演の記録が最も多く，弘化 5 年（1848）には江戸でも宝生大夫友于（後に金沢へ隠退する。雅号紫雪）が勧進能を興行するなど，宝生流自体が隆盛期にあった。

友于の前の宝生大夫英勝は加賀藩の抱えた分家宝生嘉内家（江戸居住の御手役者）から出て，徳川家斉・家慶時代の将軍指南役に就任し，将軍家の支持を背景に寛政11年（1799）には210番の謡本を流儀で初めて刊行した。それらを対象に全曲に注釈を施したのが，加賀藩御書物奉行佐久間寛台（甚次郎に聞き書きした夢裡はその子孫）著の『謡言粗志』であり，同書は文化9年（1812）に完成した。

その前年の文化8年には斉泰の父斉広（12代藩主）が規式6日間，慰み能5日間を挙行している。家督を相続した当初こそ斉広は，一統難渋を理由に年寄宅等での能・囃子を禁じたが、やがて勝手次第と解禁，自身も相続後9年を経て入国祝賀能を催すことになった。2年前の金沢城二ノ丸造営の祝賀も兼ね，いわゆる文化の規式能は，加賀藩能楽史上最大の盛儀と評される。

文化の規式能・慰み能には，江戸の宝生勇祥（嘉内家6世。英勝の養子），京都の金春流別家竹田権兵衛家6世安居，金沢の諸橋権之進・波吉宮門らの御手役者，生業を別に持つ町役者，御細工所に勤務し能芸を兼ねる御細工者が出演した。慰み能には連日，斉広が主演し，拝見を命じられた藩士・町人の数は5600人余りに上ったと言われる。

ここで注意されるのは，金春流竹田権兵衛家の存在である。同家は宝生嘉内家よりも早く，初世安信が3代藩主利常の代から抱えられ，元禄4年（1691）には5代藩主綱紀の援助を得て2世広富が京都で勧進能を興行し，「加賀の金春」（井原西鶴『世間胸算用』）の名声を天下にとどろかせているし，藩末に至っても金沢に稽古舞台と金春流を謡う弟子たちを確保していた。

一方，宝生嘉内家が綱紀に抱えられるのは5年のことであり，その背景には将軍徳川綱吉の異常な能楽好みと宝生流びいきがあった。綱吉は自身舞うことに熱中しただけでなく，側近や諸大名にも趣味の共有を強制し，貞享3年（1686）には綱紀にも命じて，江戸城二

ノ丸で「桜川」を舞わせている。

そういう将軍の上意に備えて，綱紀は前年から稽古を始め，後年，嗣子吉徳にも促して少年期から習わせている。稽古の過程で綱紀は将軍のひいきする宝生大夫友春を招き，やがてその次男吉之助（嘉内家祖）を藩で抱えるとともに，喜多流（その前は金春流）の諸橋，金春流（その前は観世流）の波吉を宝生流に転向させ，催能を底辺で支える御細工者の兼芸制度を整備した。

いわゆる加賀宝生の伝統は，このように極めて政治的な思惑が働いた結果，綱紀治藩の貞享・元禄期に端を発する。そして将軍の嗜好は，就任以前の環境やスターの登場（喜多流の祖，北七大夫が好例）などによって時々に変化し，五座の消長を左右する。

綱吉ほどの能好きは以後出なかったが，加賀藩が宝生流を主体としつつ金春流の扶持も続け，あるいはシテ方以外の諸役，ワキ方・囃子方（笛・小鼓・大鼓・太鼓）・狂言方のそれぞれにおいても複数の流儀を抱えていたのは，時代の変化に対応する用意とも見られる。

それらの諸役を束ねる大夫の位置に，加賀藩では宝生嘉内家が就き，地元の役者も参集して演能を持続すること百数十年，波吉甚次郎の記憶する斉泰時代は，加賀宝生の自覚と評判が最後の頂点に達する時期であったらしい。

（『ふるさと石川歴史館』北國新聞社，2002 年 6 月）

第二章　近代能楽史料としての『三百年祭記事』二種

昭和の初めに刊行された『石川県史』全5編は，第貳編・第参編の藩治時代を中心に，詳細な能楽史記述を各章「社会種々相」や「儀式慣習」の章に挿入して，地方能楽史研究の基準を早くに示したことでも再評価されてよいであろう。編者の日置謙は明治 44 年（1911）創刊の『能楽時報』の主筆を務め，大正 10 年（1921）刊の名高い『松風余韻』に「加賀宝生の沿革一般と佐野吉之助君の地位」を書いている。地方能楽界に精通した人の手になる通史として，『石川県史』は地元で繰り返し参照されてきただけでなく，地方の事情に広く目配りをした全国版の記述はどの分野でも極めて困難なため，たとえば第貳編の 3 年後に刊行された野々村戒三著『能楽古今記』（春陽堂）中の「地方能楽篇」などに第貳編の成果がそのまま取り込まれた事実があり，取り込むに足る『石川県史』の水準と取り込んだ野々村の見識には，私たちも折々に振り返り，立ち戻って，能楽史記述を継承し，更新してゆく必要があると思われる。

その『石川県史』では，明治維新以後の近代を第四編に取り扱うが，第四編には能楽史に関するまとまった記述がなく，わずかに明治5年（1872）展覧会余興の舞囃子（金沢神社奉納），同 24 年金沢開始三百年祭並びに 32 年旧藩祖三百年祭余興の能楽（尾山神社奉納），同35年尾山神社昇格奉告祭の神事能，同12年並びに43前田家本郷邸行幸啓の際の演能に，切れ切れに言及するのを見いだすばかりである（展覧会の例は「勧業一般」，残り5例は「旧藩祖の余光」の節）。しかし維新前後の一時期を除いて，石川県内の能楽が，記述すべき内容を持たなかったわけではない。明治 34 年の金沢能楽会の設立を始め，藩政期とはまた性質の異なる隆盛の歴史を，日置謙自身が共に歩んだことは，右の「加賀宝生の沿革一般と佐野吉之助君の地位」において，全37頁中13頁を維新後に当て，佐野吉之助の足跡をたどる筆致の親しさにも推察される。

日置謙は自分の目や耳で直接見聞した事柄を，県内近代能楽史の材料として豊富に蓄えていたはずであるが，それらを駆使して藩治時代のように詳述することは，佐野吉之助追悼の書以外には，特に試みなかったらしい。同時代のことは知る人も多く，まだその必要に迫られなかったとも言えるし，歴史を対象化し，材料を選択する難しさを，当然，同時代に対しては，日置謙も感じていたであろう。ちなみに，『石川県史』第参編と同じ昭和4年（1929）に刊行された『稿本金沢市史』風俗編第二（和田文次郎編）も，「廃藩以後の能楽」の節（2 頁）を金沢能楽会の設立までで閉じている。明治維新から金沢能楽会の設立を経て昭和の戦後に至る近代能楽史の全体が，ようやく県内通史記述の範囲に収まるのは，『石川県史現代篇（2)』の刊行された昭和38年のことである。ただ『現代篇』はその後の続刊分を含めても，能楽に振り当てられた頁数が少なく，日置謙執筆時に比べて充実したとは認めにくい。日置謙に続く能楽史研究の業績は，梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』（北国出版社、昭和47年刊）の出現を，さらに待たねばならなかった。

さて『石川県史』第四編が取り上げた明治の能楽行事6例の内，本稿では金沢開始三百年祭と旧藩祖三百年祭の2例について，石川県立図書館所蔵の資料を用いて，能楽行事の具体的な内容と資料の価値を明確にしておきたい。『石川県史』では 2 例とも祭事の余興に能楽が行われたと記すのみであり，拙稿「金沢能楽会の百年」（『金沢能楽会百年の歩

み』下所収。平成 13 年刊）では，『北陸政論』『北國新聞』等、地元新聞の記事に基づいて記述するほかなく，とくに金沢開始三百年祭に関しては肝心の番組が把握できていなかった。旧藩祖三百年祭の方は複数の資料が入手でき，主として『北國新聞』の記事によって，いくらか具体的な紹介が可能になったが，このほど両者とも行事の全体を記録した『金沢開始三百年祭記事』『旧藩祖三百年祭記事』が存在することに気づいたので，本欄を借りて拾遺の報告を行うことにする。

まず明治 29 年（1896），上森捨次郎発行の『金沢開始三百年祭記事』は本文 72 丁の活版冊子であり，趣意書の引用，規約条文の掲出に始まり，20 丁余の醵金者名簿や会計報告・残金処理規程を載せ，また博物館の展示物を解説したり，市中各町の景況を報じている。この祝祭は文禄元年（1592）に藩祖前田利家が尾山城を改修して金沢城を築き始め，市街を開いてから三百年に当たることを記念して，明治 24 年の 10 月 11 日から 15 日までの 5 日間，藩祖を祀る尾山神社を式場に挙行された。なお『記事』中には，「開始」と「開市」の両表記が混在している。

『記事』によれば，5 日間の祝典は次のような次第で進行した。

【11 日】祝砲・祭式・幣帛典供使祝詞・稲垣委員長告文・岩山県知事祝詞・能楽・和式騎馬・幌引騎馬・競馬・撃剣・祝宴・余興（烟火・角力）

【12 日】能楽・和式騎馬・幌引騎馬・競馬・余興（烟火・角力）

【13 日】神輿渡御・備押式・行軍式・和式騎馬・幌引騎馬・競馬・余興（烟火）

【14 日】神輿渡御・行軍式・余興（烟火）

【15 日】余興（烟火・手踊）

『記事』とは別に「一目瞭然加賀金沢開始三百年祝祭各町賑ひ聞取番附」と題する1枚の刷り物（昭和12年加陽探花房主人整理・石川県立図書館蔵『尾山神社聚英』所収。『石川県史』第四編所掲）もあり，併せて参照すると，騎馬・競馬・備押式・角力は出羽町練兵場で行われ，練兵場と卯辰山では烟火（花火）が打ち上げられた。烟火・角力・手踊の三つは余興と明記され，能楽・競馬・撃剣等と区別する意識が見て取れる。もちろん祭式は知事祝詞の後，参列者が順次礼拝し，御酒と菓子を振る舞われたところで閉じ，招待者は金谷館へ移動しているから，能楽以下は祭式の枠外にあり，『北陸政論』10月13日記事が「三百年祭余興として尾山神社に能狂言の催ほしあり」と報じたとおり，実質は他の余興と変わりない（8年後の『旧藩祖三百年祭記事』では能楽も余興の一つに数えている）のであろうが，

> ○能楽ハ祝典ノ前式トシテ第一日ノ払暁ニ翁一番ヲ舞ヒ始シメ祭式ノ畢ルヲ待チ夫レヨリ間断ナク舞ヒ了レリ狂言六番ヲ合セ総テ十八番ナリ

と書かれているように，「翁」を祝典の前式として奉納し，祭式終了（午後1時）後及び第2日の行事の核となったこと，そして参拝者の動員に大きく貢献したであろうことは，幕藩体制下の式楽的性格をほうふつとさせる。

2日間の番組は次のとおりである。

【11 日】

翁　千歳　越澤太郎（弥太郎か）＼三番叟　大桑十左衛門＼面箱　小野貢次

高砂　シテ　小竹才六＼ワキ　竹田與八郎＼大鼓　飯島佐之六＼小鼓　後東晴一＼笛　藤田多嘉蔵＼太鼓　北島政厚

田村　シテ　木村金太郎＼ワキ　藤田政次郎＼大鼓　岩上茂平＼小鼓　寺田次作＼笛　大浦嘉久太郎

草紙洗　シテ　波吉甚次郎＼ワキ　竹中俊太郎＼大鼓　河村正之＼小鼓　三田村定形＼笛　磯野政勝

是界　シテ　相馬勝之＼ワキ　谷文太郎＼大鼓　小杉了祐＼小鼓　湯浅勇三＼笛　中島勇吉＼太鼓　正木九八

羅生門　シテ　井上吉太郎＼ワキ　竹田與八郎＼大鼓　岩上茂平＼小鼓　谷真澄＼笛　箕谷九六＼太鼓　村田長通

祝言　岩船　シテ　相馬勝之＼ワキ　水野太右衛門＼大鼓　才田千十二＼小鼓　大野定一＼笛　中村兵次＼太鼓　藤田又八（笛が藤田，太鼓が中林であろう）

狂言＼張蛸　中村藤造　小野貢次　大幸九郎（大場であろう）

文荷ない

三人片輪

【12 日】

枕慈童　シテ　相馬勝之＼ワキ　水野太右衛門＼大鼓　河村正之＼小鼓　大野定一＼笛　小幡和平＼太鼓　村田長通

俊成忠度　シテ　佐野吉之助＼ワキ　谷文太郎＼大鼓　岩上茂平＼小鼓　藤井準＼笛　藤田又八

黒塚　シテ　波吉甚次郎＼ワキ　竹田與八郎＼大鼓　飯島佐之六＼小鼓　後東晴一＼笛　本保全儀＼太鼓　辰巳孝太郎

望月　シテ　小竹才六＼ワキ　竹中俊太郎＼大鼓　斉田千十二＼小鼓　三田村定形＼笛　藤田多嘉蔵＼太鼓　竹内與五平

猩々　シテ　高木秀綱＼ワキ　殿田音次郎＼大鼓　岩上茂平＼小鼓　寺田次作＼笛　藤田又八＼太鼓　北島政厚

狂言＼八幡前　小野貢次　中村藤造　大桑十左衛門

杭カ人カ

米市

上の出演者の内，波吉・相馬・竹中・藤田・後東・湯浅・飯島・小杉・斎田（敷村）・中林・辰巳・竹内・中村・大場らは，藩政期から続く御手役者（専業）や町役者（兼業）の家柄，あるいは彼らの古い弟子筋に当たる。明治維新後，藩の扶持を離れた役者たちは，次第に能楽界から遠ざかり，上京・移住する者も相次いだ。地元御手役者の両雄，波吉甚次郎も明治 19 年に上京，一方，9 世諸橋権之進は維新後，相馬勝之と改名し，小竹・佐野ら次代の担い手を育成することに晩年の情熱を注いでいた（28 年没）。佐野吉之助が私財をなげうって舞台を建設し（33 年），金沢能楽会設立（34 年）の拠点とするのはまだ 10 年ほど先のこと，しかし右の出演者中，小竹・相馬・佐野・高木，竹田・谷・殿田，藤田（多嘉蔵）・大浦・磯野・藤田（又八），寺田・湯浅・大野，飯島・河村，竹内，大桑・中村らの人々は，間もなく石川県能楽会（26 年設立）に結集する。そのように新旧の勢力が交替する過渡期にあって，金沢開始三百年祭の能楽には，両勢力が総力を挙げて取り組んだ様子がうかがわれる。祝祭講員中の能楽担当主任 9 氏には，三田村・竹中・後東の 3 楽師が含まれ，彼らが番組作りの実務を請け負ったと思われる。

明治 24 年の金沢開始三百年祭とその能楽は，22 年の東照宮関東入国三百年祭とその能楽を当然範とし，27 年の富山開始二百五十年祭とその能楽に影響を与えたはずである（実際，金沢から富山へ楽師 15 人が招請された）。そういう広がりの中に位置づけるとともに，定例化する封国祭（前田利家の入部を記念する祭）や 26 年の前田慶寧贈位慶賀祭，32 年の旧藩祖三百年祭，35 年の尾山神社慶賀祭，と打ち続く尾山神社能楽史の流れに注目する必要もあろう。全国的な能楽復興の傾向は，明治 30 年代に入る頃から漸次鮮明になるが，金沢でも旧加賀八家に新興富裕層が加わり，近代能楽史の始まりを強力に後押しした（拙稿「明治の能楽復興とその地方展開」『文学』第 3 巻第 5 号，平成 14 年）。その象徴的な場所が尾山神社であった。

今度は明治 32 年 4 月 27 日から 5 月 3 日までの 7 日間，やはり尾山神社で挙行された旧藩祖三百年祭について，『旧藩祖三百年祭記事』（35 年，佐久間龍太郎発行）から知られる事柄を略記しておこう。祭典は祭式・神輿渡御・時代展覧会・余興・宴会の 5 部に分けて記録してある。余興は尾山神社と出羽町練兵場等であり，毎日の煙火のほかに能楽・競馬・演武（弓術・剣術・柔術・鎗術・居合）・相撲が行われた。能楽は 28 日午前 5 時の「翁」に始まり，翌日も併せた 2 日間で能 10 番（及び祝言 1 番）、狂言 6 番が演じられた。初日の番組は『金沢の能楽』にも掲出されているが，2 日分を併せてここに引くことにする。

【初日（4 月 28 日）】

翁　千歳　木村金次＼三番叟　藤江又喜＼面箱　西村孝作＼ワキ鼓　谷真澄＼藤岡外次郎

高砂　（シテ）佐野吉之助＼（ツレ）漆矢多美吉＼（ワキ）野村九八郎＼（ワキツレ）藤田政次郎・水野太右衛門＼（大鼓）石田清吉＼（小鼓）湯浅勇三＼（太鼓）辰巳孝太郎＼（笛）藤田多嘉蔵＼間　角谷雄次郎

田村　（シテ）佐野勝秀＼（ワキ）宮村保久＼（ワキツレ）渡辺成三・吉野豊二＼（大鼓）飯島佐之六＼（小鼓）橋喜兵衛＼（笛）正木九八＼間　樫田次一

熊野　（シテ）小竹才六＼（ツレ）柴田安太郎＼（ワキ）竹田與八郎＼（ワキツレ）小坂和一郎＼（大鼓）飯島佐之六＼（小鼓）藤岡外次郎＼（笛）磯野政勝

中入

鞍馬天狗　白頭　（シテ）大久保茂作＼（子方）辰巳孝一郎・佐野勝秀・渡辺正松＼（ワキ）谷文太郎＼（ワキツレ）中越吉太郎・渡辺成三＼（大鼓）敷村鉄太郎＼（小鼓）杉江秀直＼（太鼓）中島勇吉＼（笛）丹羽鉄三郎＼間　藤江又喜・白山捨吉・西村孝作・角谷雄次郎

大蛇　（シテ）松岡佐吉＼（ツレ）梶山金次・二保和吉郎＼（ワキ）藤田政次郎＼（ワキツレ）水野太右衛門・河合喜太郎・太田永太郎・小坂和一郎＼（大鼓）越上理吉郎＼（小鼓）杉江秀直＼（太鼓）中林兵次＼（笛）鷲田猶作＼間　西村孝作

祝言　金札　（シテ）太田永太郎＼（ツレ）上野栄次郎＼（ワキ）河合喜太郎＼（ワキツレ）谷文太郎＼（大鼓）額藤太郎＼（小鼓）野村栄次郎＼（太鼓）中山為則＼（笛）藤田多嘉蔵

松楪　白山捨吉・藤江又喜・藪野知勝

柑子俵　藪野知勝・白山捨吉・野村源次郎

蜘盗人　中村藤造・藤江又喜・角谷雄次郎・西村孝作・白山捨吉・樫田次一・野村源次郎・高橋順二郎・福久米吉・藪野知勝

【二日目（4月29日）】

鶴亀　（シテ）越沢弥太郎＼（子方）二俣和吉郎・辰巳孝一郎＼（ワキ）水野太右衛門＼（ワキツレ）宮村保久・谷文太郎＼（大鼓）飯島佐之六＼（小鼓）野村栄次郎＼（太鼓）中林兵次＼（笛）磯野政勝＼間　藪野知勝

鉢木　（シテ）小竹才六＼（ツレ）絹川次吉＼（ワキ）野村九八郎＼（ワキツレ）谷文太郎＼（大鼓）石田清吉＼（小鼓）湯浅勇三＼（笛）正木九八＼間　白山捨吉・藤江又喜

藤　（シテ）高木秀綱＼（ワキ）小坂和一郎＼（大鼓）越上理吉郎＼（小鼓）（不記）＼（太鼓）安井三治＼（笛）鷲田猶作＼間　西村藤作

とほる　クツロキ　（シテ）佐野吉之助＼（ワキ）藤田政次郎＼（大鼓）飯島佐之六＼（小鼓）藤岡外次郎＼（太鼓）中島勇吉＼（笛）丹羽鉄三郎＼間　藪野知勝

羅生門　（シテ）漆矢多美吉＼（ワキ）竹田與八郎＼（ワキツレ）吉野豊二・藤田政次郎・太田永太郎・河合喜太郎・水野太右衛門・小坂和一郎簽＼（大鼓）岩上茂平＼（小鼓）湯浅勇三＼（太鼓）河崎為直＼（笛）藤田多嘉蔵

附祝言

靱さる　中村藤造・角谷雄次郎・藪野知勝・樫田次一

樋酒　角谷雄次郎・白山捨吉・西村孝作

くさひら　西村孝作・藤江又喜・角谷雄次郎・野村源次郎・樫田次一・福久米吉・高松順次郎・白山捨吉

『金沢の能楽』には番組の出典を示さないが，著者の梶井氏が金沢市立玉川図書館に寄贈した「金沢の能楽参考文献目録」（手書き）を見ると，「旧藩祖三百年祭之記＼尾山神社」と記されていて，『記事』に類した資料に依拠するようである。同書はまた番組から，「翁」「高砂」「融」を舞った佐野吉之助が能楽界の中心的存在になりつつあることに注目している。東京へ出た5世野村万造が番外に狂言「口真似」の奉納を許された事実にしても，それを同書に「特筆すべきこと」と見なす理由は分からないが，万造ら上京組を当てにする必要がなくなり，金沢在住の新世代が主体となって番組を構成できたことに意義を見いだすべきであろう。佐野・小竹らの師，相馬勝之はすでになく，波吉甚次郎もこの度は帰郷していない。

私見ではさらに次の2点も注目されてよいと考える。すなわち『記事』中，万造の追加に触れた前文に，4月29日の能楽には前田侯爵（利嗣）が観覧する予定であったのに，宴会に出て時間の都合がつかず，令嬢・生母のみの観覧にとどまったことが関係者を落胆させたとし，

蓋シ能楽ハ旧藩ノ特粋トシテ夙ニ天下ニ名ヲ得シモノナルヲ以テ数多ノ余興中格別ニ重キヲ置カレシナリ

と述べて，日清戦争前後から高揚する「特粋」意識がここにも看取できること，それから，急の追加は万造の狂言だけでなく，今様能狂言や加賀万歳も賑わいを添えたと記してあり，明治20年代後半に金沢から京都へ移住した今様能狂言の泉祐三郎一座が，30年代にも金

沢に来演した形跡が知られること（注），以上 2 点を加えて，同『記事』を金沢における近代能楽史の有力資料と評価したい。

注　今様能狂言に関する記事は次のとおりである。

「今様能狂言　封国祭ヨリノ寄附ニ祭典事務所ヨリ幾分ノ補助ヲナシ泉祐三郎一座ニテ五月一日、二日ノ両日尾山神社内能舞台ニ於テ行ヒタルガ是レ亦数寄者ノ多キコトヽテ両日共朝来観覧者処狭キ迄ニ詰メカケ其盛況敢テ能楽ノ時ニ譲ラサリキ今番組ヲ両日ニ分チテ記サハ左ノ如シ

初日＼小鍛冶　箙　雲雀山　放下僧　張良（以上能）＼張蛸　止動方角　花折　石神（以上狂言）

次日＼邯鄲　蘆刈　鷺　正尊　岩船（以上能）＼三人聟　牛盗人　仁王　千鳥（以上狂言）」

（『石川県史だより』第 43 号，2004 年 2 月。若干増訂した。）

第三章 「金沢能楽会設立趣意」の出現を待ちながら

明治34年（1901）に設立された金沢能楽会は，平成13年にめでたく100周年を迎え，会の総力を挙げて，種々の記念事業を展開して来た。3月末から4月初めにかけて，3日間にわたる記念能や次の100年を歩み出すためのシンポジウムを開催したこと，2年がかりで記念誌『金沢能楽会の歩み』上下巻を刊行したこと，石川県立歴史博物館の特別展「能楽－加賀宝生の世界－」に後援したこと，などが事業の主要な柱と見なされる。

このうち博物館の特別展については，同館の解説図録によって，展示期間の過ぎた今でも概要を把握できる。いずれも時間を費やして出展の意義を検証したい，貴重な資料群であったと思われるが，とりわけ「金沢能楽会設立趣意」と題する1枚の刷り物が，記念誌の刊行に関わった私には注目された。それというのも，趣意書の原本は原稿も印刷物も所在が確認できず（執筆は第四高等学校長北条時敬の由），設立の翌年，明治35年7月に創刊された雑誌『能楽』によって原態を想像するしかなかったからである。

『能楽』の第3号（9月）には趣意と発起人名，役員と楽師委員の名前を，また第4号（10月）に全18カ条の規則を掲載し，さらに第5号（11月）には，今般規則改正が行われて，「名誉特別両会員の数を増加し幹事長を廃し評議員の数を定め能の催は従来四回なりしを五回に増加したり」と報じている。

今回出展された刷り物は，たとえば第14条に「能ハ毎年五回」（残りの月は袴能など）と定め，改正後の催能数に一致する（『能楽』第4号所掲の当該条には「能は毎年四回」とある）ことを見比べるまでもなく，「金沢能楽会改正規則」と明記されているとおり，改正規則とそれによる新役員・評議会の構成を周知するために，したがって明治35年10月ないし11月頃に配布された文書と思われる。

その初めに「金沢能楽会設立趣意」を置き，題字が大きいことから，刷り物全体が趣意のように錯覚しかねないが，趣意部分は当初ともちろん変わらず（年記と発起人名を削除），再掲して新規則と組み合わせたらしい。印刷を請け負った明治印刷は明治35年6月の創業であり，金沢能楽会設立当初の趣意・規則の印刷には関わっていないものの，刷り物の漢字・片仮名交じりの表記は，『能楽』所掲の平仮名交じりより原態に忠実な感じを与える。

実は『能楽』所掲の趣意・規則には明らかな誤植が散見するだけでなく，「楽師委員」の内5人の名前に「秀逸の聞へある人」を意味するという△印を冠していて，委員の力量を趣意や規則に区別する不自然さが，△印を冠せず，かつ△印の4人までを欠く刷り物と対校することで，浮かび上がってきた。誰がどういう意図で△印を冠したのであろうか。

『能楽』第5号で廃止が伝えられた幹事長が刷り物では確保されていることからも，両者の前後関係や『能楽』の情報経路，幹事長横山隆興の思惑など，様々の憶測が可能となるが，一歩でも真実に近づくには，やはり設立当初の趣意・規則の出現が待たれる。現時点での推察を述べて，大方の御教示を仰ぐことにした。

（『新・能楽ジャーナル』復刊第6号，2001年7月）

第四章　明治の能楽復興とその地方展開

－金沢能楽会の設立趣意書から読み取れること－

1．設立趣意書の諸本と原態

明治 34 年（1901）3 月に発表された「金沢能楽会設立趣意」は，発起人代表北条時敬（第四高等学校長）・横山隆平（男爵）連名の入会案内とともに，広く金沢市内の「熱心家」に配布されたはずであり，たとえば山森青硯「北条時敬」（『謳舞往来』19-5，1966 年 5 月）にも「趣意」と案内の両文書を掲載，「趣意」のみなら明治 35 年 7 月に東京で創刊された『能楽』第 3 号（9 月）にも転載している。しかし，おそらく 1 枚の刷り物ゆえに散逸しやすく，会員数 200（後述「金沢能楽会規則」第 5 条に掲げる 3 種の会員数の合計）を目標にその何倍かを印刷したであろうに，現在では当の金沢能楽会でも「趣意」の保存を確認できなくなっている。

昨年，西暦 2001 年は金沢能楽会の設立百周年に当たり，これを記念して，3 月 31 日から 5 月 6 日にかけて，石川県立歴史博物館で特別展「能楽－加賀宝生の世界－」が開催された。期間中，加賀藩能楽史の基本資料となる各種文書や前田家ゆかりの面・装束の優品の数々等とは別室に，手元の展示目録で振り返れば「金沢能楽会のあゆみ」と題され，ここのみは写真のカラーを節約した地味な扱いの資料群が，静かに集められていた。その筆頭に，出品番号 107「金沢能楽会設立趣意書」（加藤久一氏蔵）が展示され，探索していた関係者の注目するところとなった。

展示図録の「出品一覧」には「一枚刷／明治三十四年」と記載され，刷り物の題は確かに「金沢能楽会設立趣意」と書かれている。ただ実際には，刷り物のどこにも「明治三十四年」の年記は見当たらない。見ているうちに，「趣意」の文章は全体の 5 分の 1 ほどに過ぎず，次々線で区切って，「金沢能楽会改正規則」，「本会役員」，「本会評議員」の 4 部構成で 1 枚が組まれていることに気がついた。そういう構成の全体を，展示では「趣意書」と呼ぶことにしたようである。「趣意」の文章自体は，それに年々改訂を加えるということはあり得ず，展示の「趣意」が原態を保存すると考えて誤りなかろうが，「趣意」に年記がないのは，設立から年月を経て「規則」が改正された時点で（改正時の年記もない），「改正規則」以下を周知させることを第一義とし，その形式を既発表の「趣意」の再掲により整えた，というのが実情ではなかったかと推測される。

それでは「規則」の改正はいつ行われたのか。明治 35 年 11 月発行の『能楽』第 5 号に，

> 金沢能楽会に於ては規則を改正して名誉特別両会員の数を増加し幹事長を廃し評議員の数を定め能の催は従来四回なりしを五回に増加したり十月の催左の如し（10 月の番組を掲載）

と報じ，かつ 10 月発行の第 4 号には改正規前の「規則」を掲載していることから，「改正規則」を含む展示本の「趣意書」は，10 月頃に印刷・配布されたと見られる。ちなみに印刷を請け負った明治印刷株式会社は，この年 6 月の創業である（1）。

「規則」改正の内容については，『能楽』第 4 号掲載の「規則」と展示本「趣意書」の「改正規則」とを比べると，必ずしも『能楽』第 5 号に報ずるとおりではないことが分か

る。名誉会員が「大凡十名」から「大凡二十名」，特別会員が「大凡四十名」から「大凡七十名」へと，両会員の数はそれぞれ確かに増加しているが（第 5 条），幹事長は廃されたのではなく，

会長一名　副会長一名　幹事若干名　会務員若干名　演技委員若干名

の役員を置くと定めた旧「規則」第 7 条に対して，「改正規則」では副会長と幹事の間に「幹事長一名」を加え，むしろ新設した形になっている。しかし「趣意」「規則」と一組になった役員名簿（展示本付載の「本会役員」）で実際の顔触れを確認すると，横山隆平会長・奥村栄滋副会長と並んで横山隆興幹事長が設立時から就任し，3 人は改正時にも揃って留任している。旧「規則」の条文と実態の不整合を正し，「改正規則」に幹事長職を明記したというべきであろう。

評議員の数についても『能楽』記事には錯誤があり，旧「規則」に「大凡十五名」を置くと定めた第 8 条を，単に評議員を置くと改正して数字を削除している。にもかかわらず『能楽』記事には，改正時に「評議員の数を定め」たとしている。催能の頻度は年 4 回から年 5 回に増加したと報じて，これは旧「規則」と「改正規則」の各第 14 条を，『能楽』記事が正しく把握したことになる。明治 34 年の 4 月に第 1 回の能楽を催して，年内 9 カ月で 5 回の能楽（他に 4 回の袴能）を実現した自信が，金沢能楽会をして増加の改正に踏み切らせたのであろう（改正した明治 35 年の実績は能楽・袴能共に 6 回）。

このほか，旧「規則」と「改正規則」を比べると，幹事長の新設に伴う関連条における「幹事長」の語の追加，「演技ノ定日」の毎月 2 日曜日から第 3 日曜日への変更も行われているが，『能楽』記事にはそれらに触れず，情報提供者なり編集者なりの整理を加えた報道になっている。『能楽』創刊号末尾の「二号予告及希望」欄には，

○全国能楽界の状況を詳にし彼是の関係を密ならしめ共に力を合せて斯道の裨益を計らんと欲するは編者の切に希望する所なり乞ふ四方の有志続々地方の状況を詳報あらんことを

○地方状況としては啻に現在の事実のみならす従来の経歴を述べて地方能界の沿革変遷の摸様を知ることを得るも編者の最も切望して止まさる所なり

と見え，誌面編集の柱の一つである「地方能楽界」欄への情報提供が呼びかけられている（2）。金沢能楽会の「趣意」（第 3 号）と「規則」（第 4 号）には，情報提供者の名前も提供の日付も添えられず，情報の加工がどの段階で行われたかは分からないが，『能楽』記事には右に見た以外にも加工の跡が認められ，そのままを「趣意書」の原態と見るのは危険である。

まず『能楽』第 3 号掲載の「趣意」は漢字と平仮名で表記されているが，展示本・山森本の漢字・片仮名表記が本来の表記であったろう。「趣意」末尾の「明治三十四年三月」の年記と発起人名簿（13 名）は，『能楽』記事と山森本のとおりに，本来は「趣意」と一体であったのを，展示本の「規則」改正時には，設立から 1 年半を経過したので，それらを削除したのであろう。「趣意」に続いては，すでに比較した「規則」をはさんで，展示本にいう「本会役員」と「本会評議員」に相当する部分が組まれていて自然である。山森本には言及をしないが，『能楽』第 3 号には，「目下其の役員は左の如し（△印は秀逸の聞へある人）」として「仕手　宝生流　小竹才六」以下12名の「楽師委員」を，それぞれ列記している。

会長から幹事までの役員の種類は，「規則」改正の前後で変わらず（幹事長の新設の事情は前述），実際に就任した人物も，展示本で「幹事　大森孝次郎」が1名増員されたに過ぎない。しかし『能楽』記事にいう「楽師委員」は旧「規則」中にもそのような名称は使用されていない。顔触れから推して，新旧両「規則」及び展示本「本会役員」にいう「演技委員」を呼び換えたものらしい。新旧両「規則」の第7条には，会長から幹事までの役員のほかに，「会務員若干名」「演技委員若干名」を置くことが定められており，さらに実際の運営に当たっては，「能楽世話掛」と「会場取締」も「本会役員」に含めたことが，展示本の「本会役員」項によって知られる。「規則」の改正がそれら（「規則」に定めない「能楽世話掛」と「会場取締」はともかく）に及んでいない以上，旧「趣意書」にも同様の役員名簿が掲げられていたはずであるが，『能楽』記事は，会長から幹事までを役員の範囲とし，役員とは別に「楽師委員」が置かれたかに見える扱いをしている。その扱いをしたのが情報提供者か，編集者かは区別がつかない。

それにしても「楽師委員」の記載は（3），

仕手　宝生流　小竹才六／同　同　佐野吉之助／同　同　高木秀綱／脇　同下掛　竹田与八郎／大鼓　葛野流　△岩上茂平（金春流の誤り）／同　同　飯島佐之丞（佐之六の誤り）／小鼓　幸流　△松江秀直（杉江の誤り）／同　同　湯浅勇三（観世流の誤り）／太鼓　観世流　中島勇吉／笛　森田流　△鷲田猶作／同　一噌流　△藤田秀直／狂言　和泉流　△藤江又喜

というぐあいに誤植や誤認が交じり，よくも知らない役者を「秀逸の聞へある人」（△印）と紹介する無神経さは理解しがたいし，そもそも「趣意書」の役員名簿に，各人の技量の優劣を表示することはあり得ないように思われる。展示本の「演技委員」（顔触れは1年半の間に変動があり，△印の5名の内，藤江又喜を除く4名が退いている）（4）には，△印はもちろん，役種や流儀も表示していない。地元の関係者には自明のことを，全国誌の読者サービスのために誰かが手を入れ，かえって不見識を露呈したらしい。

このように一連の『能楽』記事は，金沢能楽会の設立を報じて，「趣意書」の全体ではなく骨格を，加工しながら摘記したと見るべきであり，種々の過誤が交じるにしても，そういう限界を見定めた上で，展示本・山森本の欠（とくに旧「規則」の条文と一部役員の顔触れ）を，これによって補えばよいであろう。3本補完して想定される，設立当初の「趣意書」の原態は，

(1)「趣意」＝漢字・片仮名表記。明治34年3月の年記と発起人名簿を持つ。

(2)「規則」＝漢字・片仮名表記。旧「規則」全18条。

(3)「役員」＝会長・副会長・（幹事長・）幹事・会務員・演技委員（・能楽世話掛・会場取締）の名簿。＊会務員（・能楽世話掛・会場取締）の人名は未詳。

(4)「評議員」＝同名簿。「大凡十五名」。＊人名は未詳。

という構成であったと整理できる。

2．返り咲く《八家》の時代

金沢能楽会の設立趣意書には，発起人13名が名前を連ねている。「イロハ順」に，

今村勇次郎，西永公平，男爵本多政以，北条時敬，男爵奥村栄滋，大森孝次郎，男爵

横山隆平，吉倉惣左，中屋彦十郎，村彦左衛門，能久治，山田謙次

の全員が，会長から幹事までの役員，または評議員に就任，兼任した。前掲入会案内には，北条時敬・男爵横山隆平を「発起人績代」，今村・西永・北条・吉倉・能・山田を申し込み先としている。

このうち初代会長横山隆平は，加賀藩年寄家《八家》の一つ，横山家の 11 代当主であり，幹事長横山隆興は分家に当たる。両家は鉱山業で財を成し，能楽への打ち込みようは，隆平邸内に舞台を建設（明治 29 年）するほどであった。やがて佐野吉之助が自前の舞台を持ち（同 33 年），佐野舞台をよりどころに金沢能楽会が設立される際にも，両家の援助に多くを負うていた。隆平没後も，隆平の子隆俊が会長，隆興が顧問，その子章が副会長を務めるなど，大正 5 年（1916）に隆興が没し，鉱山業が崩壊に向かう頃まで，横山両家は最大の保護者として，金沢能楽会の中心にあり続けた。

副会長の奥村栄滋，評議員（展示本）の本多政以も，それぞれ《八家》の当主であり（奥村家は横山隆平の妻の実家。本多家は《八家》の筆頭），3 人は金沢能楽会設立の前年，明治 33 年 5 月に，皇太子成婚により男爵を授けられ，華族に列せられている（全国で 59 名，金沢では他に 6 名）。奥村は同 31 年 1 月から 35 年 4 月まで第 3 代金沢市長の任にあり，大森孝次郎（展示本では幹事）は当初その助役に選ばれた（県の認可が下りず，政争を嫌って辞退）。

本多政以は明治 33 年に伊藤博文が創立した立憲政友会の創立委員，並びに同会石川県支部の会長として，当時県・市の政界を領導する勢いにあった。金沢市における同支部創立委員 6 名の内，市長奥村栄滋，弁護士会長西永公平，実業家（薬種業）中屋彦十郎の 3 名は，金沢能楽会の設立発起人でもある。本多の政治的基盤は，同 29 年に結成された金沢実業会（抗争・対立を繰り返す市議会の現状に批判的な実業家の集まり）の会長に就任し，翌年の市会議員選挙で実業会派が圧勝したことによって固まり，伊藤博文が金沢に来遊して傘下に取り込もうとするまでになった。

実業会の結成には（5），村彦左衛門（金融業）・今村勇次郎（米穀取引所理事長などを歴任）・吉倉惣左（新聞人）（6）・能久治（呉服業）ら，後に金沢能楽会の発起人となる「市内一流の素封家」（『石川県史』第 4 編）が参加し，30 年の選挙では，本多・奥村・西永・中屋・今村・能の 6 名が当選している（実業会派の当選者は 33 名）。さらに 31 年の選挙では，多くの議員が交替したが，実業会派は医師団（金沢医会の政治的別働隊。金沢医会は実業会と同じ 29 年の結成）と提携して多数派の維持に成功した。その医師団の中枢にいたのが，当選した山田謙次（初代医会会長）であり，山田も金沢能楽会の発起人に名前を連ねている。

このように金沢能楽会の設立を発起した「紳士」連は，横山両家を別格としてほぼ全員が，日清戦争後の経済発展を背景に政界に進出した実業会派の人々，『金沢市史（現代篇）上』にいう「金沢における新興ブルジョアジー」と見なされ，30 年代前半に政財界の主流派を形成していた。彼らの頂点に立つ《八家》の当主たちも，32 年の藩祖（利家）三百年祭を結束して主唱，33 年の叙爵に象徴される最盛期を迎えていた。同年，東京で前田家 15 代当主利嗣こそ没したが，横山隆平は明治 36 年まで健在，奥村栄滋の市長在任は 35 年まで，本多政以は 37 年に貴族院議員に当選するなど，城代家老の時代が再来した観さえある。

金沢能楽会の設立発起人に名前を連ねる以上，彼らの能楽への関心はもちろん高く，明治 26 年の前田慶寧（利嗣の亡父）贈位慶賀祭（9 月 4 日から 6 日まで）を本多・横山・奥村らが発起人となって執行し，自らシテを演じて尾山神社に奉納した頃から，往年の耽溺を思い出したように，能楽への接近を繰り返すことが表立ってくる。《八家》の演能（9 月 5 日）は慶賀祭の呼び物となって，立錐の余地なく見物を集め，「図らざりき今日復た大名がたの乱舞を見んとは」との感慨に涙する老人もあったらしい（『北國新聞』9 月 6 日記事）。32 年の藩祖三百年祭も余興に能楽（出演は佐野吉之助ら玄人）等を催し，金沢中が沸き立って「北の都の返り咲き」（『石川県史』第 4 編）をうたわれている。これら二つを《八家》主唱の記念碑的行事として，その間にも本多家・横山家などでは，目覚めた当主たちが先祖・先代の追善に能楽・舞囃子を手向け続けた。

明治 34 年に金沢能楽会が設立された後，実際に佐野舞台に立った発起人は約半数に過ぎず，早くも翌年 4 月には奥村栄滋市長が辞職（36 年の破産までに 4 度出演），5 月に第四高等学校長北条時敬（在任は 31 年から。出演は 1 度）が広島高等師範学校長に転任（8），7 月に横山隆平が没し（出演は 6 度），10 月に本多政以の政友会支部も解散，本多は間もなく貴族院議員に当選するが，政友会総務に就任するための寄付金の捻出に苦しみ，「自然能や謡の方も熱心でない様になられ」たと（9）伝えられている（出演は大正の初めに 3 度）。全国的に能楽復興の足取りを鈍らせた，37 年の日露戦争をおおよその区切りとして，政財界の再編が進む金沢でも，《八家》－実業会派による能楽支持の体制は，その実質を，ひとり鉱山業の順調な横山両家（宗家の隆俊，分家の隆興・章父子）に委ねることになる。

3．保存・保続から発達振興へ

明治 26 年の慶寧慶賀祭の頃から，発起人の退転が相次ぐ 35 年まで，《八家》－実業会派が台頭して金沢能楽会の設立に結集する 10 年間は，新世代の能楽師たちが衰退期を克服し，自立の道を模索した時代でもある。東京では早く明治 14 年に能楽社が設立され，芝能楽堂を拠点に復興に向けた保護活動が推進されていたが，主導する岩倉具視の死（16 年）や演劇改良論の盛行（19 年），歌舞伎天覧（20 年）のあおりで影が薄く，20 年代は保護請願書の提出（20 年）や能楽社から能楽堂（23 年）・能楽会（29 年）への改組を重ね，やはり日清戦争後の経済成長を待って，30 年代における宝生会（31 年）・観世会（33 年）等，流儀ごとの会派結成に至る。

10 年代前半の保護期を第一次復興期と見なすなら（金沢でも 11 年に金沢勧業博物館と尾山神社に舞台が建設されている），30 年代前半の第二次復興期は，保護を不要とするのではもちろんないが，定期的な活動の場（自前の舞台と諸役の結集を前提とする）を，能楽師自身が主体となって確保するという意味では，保護期から一段進んだ自立期の始まりと見てよいかも知れない。その延長に金沢でも，金沢能楽会百年の歴史が刻まれる。返り咲いた《八家》の 10 年，《八家》にとっての能楽は，近世的趣味生活への回帰に見えて，《八家》に近づいた金沢の能楽師にとっては，藩の扶持に代わる会費制の会経営により，経営基盤の安定と演技委員としての発言権を，両立させる選択に踏み出す 10 年であった。

《八家》が舞台に返り咲いた，26 年の慶寧慶賀祭には，実はその翌日（9 月 6 日）に，石川県能楽会による奉納も行われた。シテこそ《八家》らから佐野吉之助ら玄人に代わっ

たが，ワキ・囃子・狂言の三役は，顔触れがほとんど重複している。《八家》らを除く両日の出演者を，石川県能楽会の主要な会員と考えてよいであろう。8 月 11 日の『北國新聞』には，シテ方＝相馬勝之（諸橋権之進）・小竹才六，ワキ方＝竹田与八郎，笛方＝藤田多嘉蔵，大鼓方＝飯島佐之六，狂言方＝大桑十左衛門らが集まって，石川県能楽会を設立する旨の記事が掲載されている。9 月 10 日の発会式の模様を伝える同紙記事（12 日付），「県下能楽の有名家」がこの会に網羅されているとあり，広く会員を募集するといっても，稽古・温習を共にする仲間の意味らしく，27 日の協議会も飯島宅（阿南田野庵）で開催するなど，主体は玄人集団による玄人集団のための旗揚げであった。

8 年後に設立された金沢能楽会の場合は，「規則」第 6 条に，

会員ハ本会ノ演技ヲ観覧シ又ハ之ニ従事スルモノトス

と定め，会員は演技の観覧者と従事者から成るとして，観覧者すなわち素人を会員に取り込み，多く観覧者の会費収入で月例の催しを維持しつつ，第 13 条に，

会員中能楽ニ関シ一ノ技芸ニ従事スルモノヲ楽師ト称ス楽師ハ能楽ヲ演スルモノトス（中略）楽師ニハ会費ヲ免除シ又ハ相当ノ報酬ヲ交付スルコトアルヘシ

と定めて，従事者すなわち「楽師」の役割の経済的価値を認め，その役割に専念できる環境を追求している。また第 15 条に，

番組ノ調整会場ノ整理其他演技ニ関スル一切ノ事項ハ演技委員ノ指揮ニ従フヘシ

と定めて，「楽師」の代表である演技委員は，「楽師」を指揮下に置くと同時に，第 13 条（前掲中略部分）に，

但楽師ニ非ラスト雖トモ希望ニ依リ出演スルコトヲ得此場合ニ於テハ演技委員ノ承諾ヲ経ルコトヲ要ス

と定めて，会員中の非「楽師」にも希望者には出演を許可し（発起人の出演回数は前掲），その権限を握って対等に，会経営の責任を会長以下，非「楽師」の役員と分担する仕組みになっている。慶寧慶賀祭で舞台を共にした《八家》と「楽師」が，出会って 8 年後に見いだした，それぞれの思惑の結節点として，金沢能楽会の設立は位置づけられる。

26 年 9 月に発会式を行った石川県能楽会は，11 月に秋の大会を開催すべく，その準備を進める頃，10 月 28 日の『北國新聞』は，加賀能楽会の会員申し込み（金沢市内分）が 300 余名に達し，11 月 3 日に同会七尾支部の発会式を挙行すると報じている。以後，石川県能楽会の呼称は用いられず，11 月 12 日の同紙は，加賀能楽会規則の要項 9 カ条（金沢能楽会の「規則」と区別するために，これを「要項」と略称する）を掲載している。両者呼称は異なるものの，別組織というわけではなく，第 1 回の大会に向けて規則等を整備する過程で，呼称の変更を伴ったようである。

「要項」第 7 条に，

毎年春秋両度に能楽を催す其節は家族一名を限り同伴を得る但し会員外の者にして入場を需るときは会員の紹介にあらざれば之を許さず

と定め，金沢能楽会「規則」にいう観覧者を，この「要項」も会員に含むように読め，またそうでなければ，「楽師」だけで 300 名を超える会員を集めることは無理，したがって正副会頭以下の役員に素人有力者を戴いた可能性なしとしない。しかしこの会の設立が有力者の保護に発するとは，『北國新聞』のどの記事にも報じられていない。前掲 8 月 11 日記事の 6 名などが先頭に立つ，「楽師」主体の運営であったと想像される。

「要項」第6条に，

前条の目的を達せんか為め毎月第二の日曜日を以て練習日と定め能楽一切の稽古又は研究をなす

と定めるのも，金沢能楽会の「規則」第14条に，

演技ノ定日ハ毎月第二日曜日（第三日曜日に改正）トス

と定める淡泊さ（あるいは観覧者への意識）に比べると，練習・稽古・研究の用語に，やはり「楽師」の意欲が強くにじむのを感じる。

右に前条の目的というのは，「要項」第5条の，

本会は能楽を永世に保続するを目的とする

を指し，これは8月11日記事に報じる「近来能楽の衰微したるを嘆き是れを改良拡張せん」という目的，9月12日記事に報じる「石川県の特粋たる能楽を永遠に保存せん」という主旨に通じ，石川県能楽会の設立をめざした「楽師」たちの志が，「要項」中にも再確認されたと理解される。

かつて「石川県の特粋たる能楽」は，ことさら訴えずとも，永続を疑う者はなかったのであろう。近来の衰微を嘆くことが新たな常識となって，能楽会設立の目的に掲げざるを得ないほど，当事者の危機感は切実であった。伝統の不変を悠長に謳歌すると読むのは正しくない。石川県能楽会設立の主旨には，永遠に保存する前提に，「改良拡張」を目的化しているし（19年に盛行した演劇改良論は20年代前半に能楽にも波及し，男女混合能や新作能が議論されている），加賀能楽会の「要項」第9条には，次の者を除名・絶交するとして，会の体面を汚した者とは別に，「仙助能又は今様能狂言」に交わり，技芸をなした者を特記している。

明治20年代の金沢では，泉祐三郎（10）の率いる今様能狂言が，盛んに興行して人気を博していた。県庁内武官派の支持も取り付けて，招魂祭（11）の余興に奉納する権利を得ただけでなく，興行に必要な役者を伝統能楽から引き抜いてもいた。伝統能楽側は世代交代期にあり，加賀藩ゆかりの旧世代が多く没したり，上京する一方，佐野吉之助に代表される新世代はようやく舞台に立ち始めたばかり，その間隙を縫うように進出する今様能狂言の勢いは，折しも26年頃に最盛期を迎えて，伝統能楽には大きな脅威と感じられた。脅威を排除しつつ自身の「改良拡張」を図る差し迫った状況下に，伝統能楽は結束を固め，慶寧慶賀祭で《八家》に近づいたことになる。

金沢能楽会の「規則」第18条にも，

会費滞納又ハ本会ノ体面ヲ汚ス如キ行為アリタルトキハ評議員会ニ諮リ退会セシム

と定め，一般的な排除規定は設けているが，泉祐三郎一座がすでに金沢を去り，零落して脅威でなくなったために，今様能狂言を特記することは止め，設立の目的にしても，『能楽』第3号は「当地の有志相謀り能楽保存の目的を以て能楽会を設立したり」と報じたが，「規則」第1条には，

本会ノ目的ハ能楽ノ発達振興ヲ図ルニアリ

と定めて，これは東京の能楽会（29年設立）の「能楽会々則」（池内信嘉『能楽盛衰記』下巻所収）第1条に，

本会ハ能楽道ヲ維持発達セシムルノ趣意ヲ以テ其式礼を保全シ其秩序ヲ整斉シ其楽師ヲ保護シ其楽芸ヲ奨導シ其機関ヲ具備スルヲ目的トス

と定めるのを恐らく意識しているのであろう。金沢能楽会の「趣意」にも，

金沢能楽会ヲ設立シ此楽ノ振興ヲ謀ラントス

とうたい，「保存」自体の危機感はやや薄れて，「改良拡張」の迷いも消え，進むべき道をようやく見定めた口吻が，「発達振興」の用語選択にうかがわれる。

4．「趣意」の自意識と発想事情

東京で能楽会が設立された明治 29 年 7 月に，前月山口高等学校長に昇任したばかりの北条時敬は東京出張を命じられている。2 年後，北条は故郷の第四高等学校長に転任し，34 年 3 月に金沢能楽会の「設立趣意」を起草することになる。山口在任以前から謡に親しみ，伝説的な熱中（『廓堂片影』）で知られた北条は，東京出張の際に，能楽会設立の報に早くも接したであろうか。7 月 18 日及び 8 月 24 日の『読売新聞』には詳報が載り，遅くとも同紙が 1 回式能の連載を組む年末頃には，地方の能楽関係者にも周知されていたと思われる。その「設立趣意」（『能楽盛衰記』下巻所収）なり「会則」を，後続の地方能楽会が設立時に参照するのは自然なことである。金沢能楽会の設立に当たっても，「趣意」の起草者北条が東京の例を想起し，それを念頭に置いて執筆した可能性は高いと見られる。

しかし「金沢能楽会設立趣意」は，東京の例をただ模倣しているのではない。東京の能楽会は，「能楽会々則」第 6 条に，「楽師」を，

能楽道ヲ相伝シ若クハ好テ斯道ヲ錬修シ能芸ヲ以テ職トシ本会ニ随属スル者ヲ楽師トス

と規定して，所属「楽師」に限ってその称を適用し，地方能楽の存在（たとえば石川県能楽会は 3 年先行している）など視野に入れる気がなさそうなのに対して，金沢能楽会でも独自に，前掲「規則」第 13 条のとおり，同会会員中の技芸従事者を「楽師」と呼ぶことにしている。そういえば能楽の「永世保続」にしても，常識的には東京で考えるべき，大仰な使命に見えるが，ひとり金沢に引き受ける伝統の自負，独立の気概が，「規則」にも「趣意」にも横溢している。

東京でも金沢でも，能楽会の「設立趣意」は，武家の式楽としての隆盛を回顧し，維新後の衰退を慨嘆することから説き起こして，保続・振興のため会を設立するに至ったと述べている。その歴史認識は，14 年設立の能楽社社員，とりわけ岩倉具視に「猿楽ノ由来」を諮問され，「風俗歌舞源流考」（『日本近代思想大系 18 芸能』所収）の著述に当たった修史館編集官重野安繹・久米邦武両人による知識の集積が，共通の基盤となっている。その成果を取り入れて，能楽社の設立発起人の一人，旧加賀藩主前田斉泰（慶寧の父）も，芝能楽堂の舞台開きに「能楽」の扁額を掲げ，「能楽記」（『金沢市史資料偏15学芸』所収）を併記した。

遠く能楽の起源や室町期の変遷については，歴史家の研究にまつとしても，能楽社社員や発起人は旧大名家や公家たちであったから，幕藩体制下の式楽の隆盛については，「能楽記」に，

至徳川氏鎮江門，永為府朝典式。王公牧伯，往々自演習。於是乎此楽之盛，莫以加焉。

と記し，また能楽会「設立趣意」に，

幕府諸侯ニ在テハ礼式上缺クヘカラサルノ具トナシ楽師ヲ扶持シ常ニ其芸ヲ錬修セ

シメ之ヲ慶賀ニ用ヰ賓宴ニ供シ又自ラ演習シテ無上ノ歓楽トナス

と記すように，自家演習の記憶をたどり，諸侯歓楽の再現を期すことが，そのまま保護者の側からの能楽復興の「趣意」にもかなった。

これらと対照的に，石川県能楽会の「設立の趣意書」(『北國新聞』26年8月11日掲載)では，かつて諸侯の扶持を得て，能楽の道に精励した日々を，

能楽ノ義ハ往昔来伝ル処ノ舞芸ニシテ則チ当金沢市ニ於ケル旧金沢藩政中観音院御神事能及ヒ寺中祭礼能ノ挙典アル為メ能楽ノ道進歩セルハ曾テ比類ナシト云モ誣盲ニアラサルナリ

と「楽師」(藩政期は御手役者・町役者)の側から回顧し，大規模な藩の公式行事(12)よりは，自らが主体となる年中神事への参勤を，隆盛期の思い出にする風である。保護者が前面に出ず，「楽師」集団の結束によって，しかも地方の伝統をよりどころに，身近な旧弊の改良から，確かな保続の方法を手に入れようとする，この会らしい歴史把握に見える。

そして金沢能楽会の「設立趣意」では，石川県能楽会(加賀能楽会)の「楽師」の自覚の上に，再び保護者が手を差し伸べて，「楽師」に代わって振興を訴える。「楽師」を扶持し，「自ラ演習」した諸侯たちは，明治4年(1871)の廃藩置県と同時に，維新政府から東京移住を命じられ，その扶持を「楽師」たちは差し止められた。東京に移住した諸侯たちは，主に五座諸流の家元たちを保護の対象とし，東京で能楽復興を推進した。諸侯の保護を離れた地方「楽師」たちは，新たな保護者の出現するまで，存亡の危機を地方でしのがなければならなかった。

14年設立の能楽社から29年設立の能楽会まで，東京の能楽復興が，提唱から一応の軌道に乗るまでには15年を要した。東京の能楽会設立から金沢の能楽会設立までには，さらに5年を要し，その間に《八家》－実業会派が台頭して，前田家退去後の保護者空白期はようやく終わろうとする。長く続いた空白期に耐えかね，保護者の参加を待たずに，「楽師」だけで行動に出たのが，26年の石川県能楽会の旗揚げであった。能楽保続の方法を求め，「日夜憔慮スル」「楽師」たちの意気込みは，しかし台頭する保護者たちにも通じていたようである。金沢能楽会の「設立趣意」は，維新後の全国的衰退と金沢の現状について，次のような認識を示している。

然ルニ王政維新後百事更改人情旧ヲ棄テ新ヲ趁フノ余リ此道次第ニ荒廃衰亡シ前人逝イテ後人継カス堪能達技ノ者寥々トシテ暁星ノ如ク旧藩市府ニシテ今尚能師楽人ノ残存シテ演技ノ観ルヘキモノハ纔ニ我カ金沢アルニ過キス是レ実ニ提封百万上下太平ヲ楽ミシ流風余沢トイフヘシ今ニシテ斯道ノ挽回ヲ計ラサルトキハ数百年来名人上手ノ苦心錬磨ヲ経テ大成シ来リ我国特得ノ曲技トシテ其美ヲ誇シモノモ終ニ絶滅シ再ヒ睹ルヲ得サルニ至ラン是レ豈ニ一大恨事ニアラスヤ余等此ニ慨スル所アリ金沢能楽会ヲ設立シ此楽ノ振興ヲ謀ラントス

三百諸侯が常に一座の能役者を扶持した武家の時代，それぞれの藩市府に能楽が行われ，士民上下の太平を享受する象徴的存在であった。百万石の城下町金沢でも，その伝統が形成されて根強く，旧藩先人の余沢ゆえに，能楽の衰退した維新後も，わずかに金沢にだけは，見るべき演技力を持った「能師楽人」が残存している。金沢において残存勢力を結集し，挽回を図らなければ，数百年かけて大成した「我国特得ノ曲技」が，我が国において

絶滅しかねない，と読めるような筆の運びになっている。

「趣意」を起草した北条時敬は，東京の能楽会設立や宝生会（31年）・観世会（33年）等流儀ごとの結束，という能楽復興の確かな足取りを，もちろん承知の上で筆を執っている。同じ頃，地方能楽も隆盛に向かう兆しが見られた。大正6年（1917）刊の横井春野『能楽全史』（龍吟社）にそう回顧し，同書は大阪・京都に言及したついでに，「地方能楽おこらんとす」の見出しのもと，金沢・熊本・松山・名古屋を例示している。そのような全国的な能楽復興の趨勢を，北条時敬が知らぬのではなく，「趣意」に「能楽ノ妙趣」を説いて，

亦以テ世間滔々タル桑間濮上鄭衛淫靡ノ俗調ヲ警醒シ優美高雅ノ好尚ヲ鼓吹シ以テ世ノ醇風美俗ニ裨補スル所少カラサルヘシ

と述べるあたり，能楽社設立時や演劇改良論以来の，「鄭声淫曲」を排し，「高尚優美」を是とする，類型的論調に連なるといえる。

設立趣意書の構成も，歴史・妙趣の基礎知識も，北条時敬は他に範を仰ぎながら，「趣意」の読者としては，もちろん誰より金沢の人々を想定している。「趣意」を全国発信するなら，無知で尊大な印象を与えかねないが，入会を誘う相手は金沢の人々である。「自ラ演習」する権力者の祖，豊臣秀吉の愛好を語る際にも，「趣意」では，

豊太閤ハ搏虎屠龍ノ手を斂メテ自ラ徳川前田以下ノ諸将ト共ニ之ヲ舞ヒ

という表現で，抜かりなく前田利家を諸将の代表とし，「自ラ演習」する三氏の愛好は，29年1月6日の『北國新聞』に掲載された無署名記事，「金沢と謡曲」にも，「就中秀吉，家康，利家等は武将中の最も能楽に巧みなるを以て聞えたる英傑にあらずや」と記されて（3人が出演した天覧能の例を紹介している），金沢ではよく知られた史実であるから，それへの言及は，「我カ金沢」にしか「楽師」が残存しないという言い方とともに，百万石の自尊心を刺激して，能楽復興の先陣を名乗る正当性を，反対勢力にも納得させたことであろう。地元経済の停滞・不振を嘆き，その原因を実業家による謡曲への耽溺，いわゆる「睡眠的生活」，「懐旧的思想」に見いだそうとする論陣は（13），実業会派の台頭するにつれ，ようやく少数派に転じつつあってと想像されるが，彼らにも「石川県の特粋」としての評価は受け入れやすかろう。異論を吸収し，支持を拡大する「趣意」のねらいは，隠れもないように見える。

金沢能楽会の設立を考察するのに用いるべき基本資料は，いうまでもなく設立趣意書である。佐野吉之助の個人的努力や横山両家の援助については，繰り返し賛嘆され，伝承も多く記述されてきたが，設立趣意書に立ち戻っての検討は，従来，「趣意」の要約と「規則」の抜粋程度にとどまっている（14）。本稿ではその原態を推定した上で，発起人・役員の顔触れ，「規則」の条文，「趣意」の表現を分析し，それらの意味するところから，「楽師」と《八家》の接近する過程に，設立の必然を探ってみた。

金沢能楽会の設立事情を解明するには，視野を同時代の他地方に広げて，能楽復興の流れの中に位置を見定めることが必要になる。本稿ではその点にも留意した。東京も含めて，地方能楽は地方に孤立してあるのではない。それぞれの軌跡を重ね合わせて，地方ごとの実情に外から光を当てる作業が，やがて近代能楽史の全体像を更新すると思われる。「金沢能楽会設立趣意書」と題されて出現した一枚の刷り物は，その端緒となるであろうか。

注

(1)『金沢市史資料編11近代一』所収昭和13年（1938）版「金沢工場要覧」による。

(2) 創刊号では，横浜・大阪・広島・高松・伊予八幡浜・松山・豊前高田・加賀大聖寺・豊前中津の状況が，「報」「通信」の日付を添えて報道されている。金沢については，第2号に尾山神社昇格慶賀神事能と金沢能楽会第16回袴能の予告記事が最初。

(3) 役種・流儀については，たとえば佐野安彦「金沢能楽会創立の功労者」（金沢能楽会『会報』，1953年12月）などを参照。また大鼓金春流の歴史は表章「「大鼓金春流」考－金春三郎右衛門家の歴代、他－」（『能楽研究』23，1999年3月）・同「（下の一）」（同誌26，2002年3月）に詳しく，その近代は拙稿「金沢能楽会の百年」（『金沢能楽会百年の歩み』下［同会，2001年3月］）に概観してある。

(4) 代わりに大聖寺の錦城能楽会（明治34年11月設立。規約及び役員名簿は『能楽』第3号に掲載）から5人の「委員」が加わったことが注目される。

(5) 金沢実業会の設立趣意書は『北國新聞』明治29年7月23日掲載，前掲『金沢市史資料編11近代一』所収。当時の実業家の業種については同書所収「明治二八年度県税中商業税分賦等級別交名簿」参照。

(6) 森山誠一氏の御教示による。吉倉は金沢能楽会への出演回数は発起人中，横山隆興に次いで多い。

(7) 慶寧慶賀祭の行われた明治26年から金沢実業会の結成された29年頃にかけて，金沢市域における経済活動の停滞・不振を，実業家の能楽趣味と関連づけて批判したり，擁護する論陣が『北國新聞』紙上に張られていたことを，拙稿「金沢能楽会の百年」で追跡している。

(8) 北条時敬の経歴並びに能楽への傾倒は，西田幾多郎編『廓堂片影』（教育研究会，1931年6月）に詳しい。なお北条時敬は明治35年5月に広島高等師範学校長に転任し，同地でも広島能楽調成会の会長に就任するなど普及振興に努めている。調成会の設立は42年（『芸備新聞』同年4月29日），北条会長の名前は『中国新聞』44年5月16日記事に出る（いずれも倉田喜弘『明治の能楽（四）』［国立能楽堂，1997年3月］による）。

(9) 佐野安彦「金沢の能　その五」（『宝生』1962年2月）。

(10) 江戸後期の辻能，堀井仙助座の7世仙助の弟子である林寿三郎の後継者。寿三郎は明治16年に没するまで，金沢で6度の興行が確認される。寿三郎の没後，招魂祭への出演依頼を機に，泉祐三郎が一座を再結成した。その盛衰を知る基本資料は，佐久間夢裡が『北國新聞』（明治30年6月）に連載した「今様能狂言」の記事である。

(11) 尾山神社で執行される西南戦争戦死者の慰霊儀式。

(12) 拙稿「加賀・能登の能楽の歴史」（『加賀・能登の能楽』［石川県，1997年3月］所収）等参照。

(13)「金沢実業家に警告す」（『北國新聞』明治26年11月30日），「金沢風俗の一斑其四」（同紙，27年6月18日）など。

(14) 梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』（北国出版社，1972年6月）など。

（『文学』第3巻第5号，2002年9，10月号）

第五章 「加賀宝生子ども塾」の試み

かつて空から謡が降ると言われた金沢でも，最近は見所に空席が目立ったり，大学のサークル活動の存続が危ぶまれるようになってきた。結成以来100年の歴史を誇る金沢能楽会も，会員数の漸減傾向がしばしば話題になっている。愛好者の高齢化やその継承を少子化が難しくしている現状は，各種座談会等で繰り返し指摘され，もちろん当地でも早くから，危機感を共有する人たちが様々な対策を講じてきた。

金沢市文化財保護課長の河原清氏に，平成 14 年開設の「加賀宝生子ども塾」の様子を聞いてみた。金沢市は昭和25年に「加賀宝生」を市の記念文化財に指定し，「文化都市を建設する」目的で（同選奨条例），以来，独特の普及・振興策を打ち出してきた。河原課長も，祖父の代から謡を嗜む家族に囲まれ，自身，幸流小鼓方として舞台を勤めている。

小中学生を対象とする子供謡教室（後に狂言教室も）は，石川県立能楽堂でも実施して，すでに 30 年近い実績があるが，新しい「子ども塾」の特徴は，開講時期を夏休み期間中に限定せず，2年間全48回の長期にわたること，その間，地元能楽師の実技指導を受け，謡や仕舞を習うだけでなく，囃子や狂言も含めて，役に分かれて能一番を演ずるまでを目標とすること，加賀宝生子ども謡本を使用し，ゆかりの名所を見学するなど，能楽全体を分かりやすく，体系的に学ぶカリキュラムが工夫されていることに認められる。

第1期生は募集予定の2倍を超す44人が受講を継続し，その成果を平成16年3月開催の加賀宝生子ども能で発表する。将来，金沢市の伝統芸能伝習者（平成元年制定）に認定され，研修を積み重ねて，「加賀宝生」の後継者に育つ子が出てくるであろう。受講以前に能楽とは無縁であったほとんどの父母が，子ども以上に熱心になり，愛好者の裾野が広がったことも，河原課長には思いがけない収穫であったという。息長く見守りたい試みである。

（『新・能楽ジャーナル』第 22 号，2004 年 3 月）

第六章　空から謡が降るということ

金沢では「空から謡が降る」と言われる。「空」の代わりに，古くは「高所（たか）から」とも言ったらしい。二階から謡が聞こえると書いた例もあるが，多くは屋根の瓦職人や樹上の植木屋が仕事の合間に口ずさむのがそう聞こえると説明される。郷土史や観光案内書の類には必ず言及され，和菓子や料亭の宣伝文にも頻繁に利用される。しかし，いつ頃から言われるようになったのか，時代を特定する記述は見当たらず，文献をさかのぼっての探索は容易でない。

たまたま『北國新聞』の能楽関連記事を整理していて，北國宝生会の設立を告げる昭和53年（1978）2月24日の記事の中に，次のような解説のあるのが目にとまった。

> 初代佐野吉之助師らが加賀宝生を再興した明治から大正年間「加賀では空から謡が降ってくる」と言われた。植木職，屋根職人など庶民層にまで広く普及した加賀宝生のすそ野の広がりぶりを表現する言葉ではあったが，この言葉にもう一度生命を吹き込みたいというのが大方の強い願いであった。

今日まで100年続く金沢能楽会の結成は明治34年（1901）のことであり，東京でも明治43年（1910）の前田侯爵邸行幸啓能を頂点に，大正初年頃までは最初の黄金時代を復興第一世代が謳歌していた。加賀藩の能楽を主導した藩主は維新後，東京に移住し，専業・兼芸の役者たちが離散する中，旧勢力に代わって伝統再生の担い手となったのは，金沢に残った町役者の芸系や新興富裕層であり，その周辺から加賀宝生の大衆化が進んだ。

明治43年の行幸啓能に出演するほど東京で活躍し，高齢を理由にその年帰郷した，和泉流狂言師高島弥五郎の回顧談（『時事新報』9月27日）には，

> 御承知の通り加州は昔から謡が盛んで，上は殿様から下は草刈る童に至る迄皆加賀宝生を謡ひまして（後略）

という表現が見える。それは藩政期における謡の普及を指して言うのであり，加賀宝生の隆盛の主体は，藩政期はあくまで「殿様」に見いだすべきであろう。能楽が大成された室町時代とは逆に，江戸時代は徳川将軍から藩主へ，藩主から家臣・領民へ，上から下へと，半ば強制的に能楽が広められていった。その意味では，まさに空から降るように，金沢城下へ謡が浸透したと言える。

しかし，近代の金沢市民は，誰に強制されるのでもなく，いったん浸透した伝統の継承を，維新による断絶をしのいで，自ら選び取った。佐野吉之助らは私財をなげうって，金沢能楽会に結集した。幕藩体制期に寺子屋で小謡を教えたり，婚礼の席で「高砂や」の謡を謡ったりしたのは，ひとり金沢の城下に限られたことではないが，明治中期の金沢では小学校を卒業するより謡の習得の方が重視されたと伝えられ（石橋忍月「金沢風俗の一斑」『北國新聞』明治27年6月18日），昭和の戦中から戦後にかけては，謡を嗜む人の人口比は日本一と喧伝されるに至る。

その一例として，黒田吉夫「石川県能楽界の展望」（『加賀と宝生』昭和25年4月）には，

> 大小の酒宴にはたいてい祝言の謡が出たもので，従つて小謡の一つもうたえなければ肩身が狭いというような気持から，勤め人も商人も職人も夕方ともなれば近所の先

輩のところに謡を習いに行くという気風があつた。そしてそれが今も残つているようである。

と記し，市内の同好者は1万人を下るまいと推定している。

空から降る謡のシャワーを浴びて，職種や年齢，性別を問わず，謡を習う気風に染まった結果，昭和52年（1977）正月の『北國新聞』記事が県内の能楽人口5万人余と報じるまでに拡大する。人口比の断りが外れて，「謡曲人口日本一」が一人歩きしたのもこの頃である。当時の金沢能楽会会員はおよそ800人，黒田の文章にはかつて400を下ることがなかったとあり，平成14年（2002）現在は554人を数える。

会員以外の愛好者の数は確かめようがないが，能楽協会会員名簿（わんや書店『能楽手帖』収載）に記載された能楽師の数で比べると，平成14年現在，全国で1500人余のうち，石川県在住者は60人に上り，都道府県別8位，人口比では京都府（150人）に次ぐ位置にある。さらに注目すべきは，シテ方・ワキ方・笛方・小鼓方・大鼓方・太鼓方・狂言方の諸役が揃い，在住の役者だけで番組が構成できるのは，東京・京都・大阪・愛知の上位4都府県と石川県だけである。しかも，重要無形文化財総合指定「社団法人日本能楽会」会員14人を擁している（全国で456人）。その反面，素人愛好者の減少，高齢化は早くから指摘され，空洞化によって能楽師の住所が拡散し，市中で謡や囃子が聞かれないとも言われる。

【能楽師在住地の分布（「能楽協会会員名簿（2002年7月現在）」を整理】

	シテ方	ワキ方	笛方	小鼓方	大鼓方	太鼓方	狂言方	計
1	東京 297	東京 20	東京 20	東京 21	東京 14	東京 16	東京 41	東 京 429
2	京 都 102	兵庫 11	京都 7	京都 8	京都 7	京都 6	京都 16	京 都 150
3	大阪 78	神 奈 川 5	福岡 5	大阪 6	大阪 7	福岡 4	神 奈 川 13	大 阪 112
4	愛知 71	愛知 4	愛知 4	福岡 5	福岡 5	大阪 4	福岡 11	愛知 96
5	神 奈 川 64	京都 4	石川 4	石川 4	神 奈 川 3	岡山 2	大阪 10	福岡 91
6	福岡 61	大阪 3	大阪 4	兵庫 3	愛知 3	熊本 2	愛知 9	神 奈 川 87
7	兵庫 59	愛媛 3	富山 3	愛知 3	石川 2	石川 2	兵庫 7	兵庫 84
8	埼玉 47	石川 3	奈良 3	広島 2	滋賀 2	愛知 2	埼玉 7	石川 60
9	石川 39	埼玉 3	岡山 2	福井 2	兵庫 2	以下略	石川 6	埼玉 59
10	千葉 37	以下略	兵庫 2	愛媛 2	以下略		滋賀 5	千葉 40
11	奈良 29		広島 2	岐阜 2			富山 4	奈良 37
12	長野 23		神 奈 川 2	奈良 2			大分 4	滋賀 25
13	滋賀 17		以下略	以下略			奈良 3	長野 23
14	広島 14						三重 2	富山 21
15	富山 12						千葉 2	広島 20

	以下略						以下略	以下略
計	1124	63	63	64	48	42	143	1547
	観 世 579	宝生 27	森田 43	幸 31	高安 13	金春 26	大蔵 89	
	宝 生 265	高安 18	一噌 16	大倉 17	大倉 12	観世 16	和泉 54	
	金 春 122	福王 18	藤田 4	幸清 9	葛野 12			
	金剛 97			観世 7	石井 10			
	喜多 61				観世 1			

役者の肉体には限りがある。装束や舞台も更新が必要になる。そういう条件のもとで，長く隆盛を維持するのは，元来甚だ困難なことである。それだけに，空から謡が降る伝統は，あたかも「虚空に花降り音楽聞こえ」（「羽衣」の一節）た時のように，旅行者に驚かれ，地元で自賛されたのであろう。加賀藩の御細工所以来，職人の兼芸が根付いていたとは言え，地上の仕事場で謡っていては遠くまで聞こえまい。高所で気持ちよく謡う声が朗々と響き渡り，典雅な言葉が空から降りしきることで，大衆化した加賀宝生にいくぶん神秘の印象が残り，伝説の「謡曲王国」に住む快感をもたらしてきたのではなかろうか。

（『おもしろ金沢学』北國新聞社，2003 年 8 月。若干増訂した）

附篇　「金沢能楽会の百年」人名索引

（数字は『金沢能楽会百年の歩み』下巻所収，西村聡「金沢能楽会の百年」の頁）

相川弁護士　２１０

相木屋徳十郎　２６

相坂成盛　１５７

相森幹太郎　１３２・１３７・１５２

赤丸雪山　６４

秋山稔　５８

朝倉粂太郎　１５１

浅田外美二　３１・１３２・１３４・１４２・１５２・１５７・１６８・１７３

浅野栄足　２０７

安達弘通　６４

阿南多野庵主人（飯島）　１０２

天野文雄　１５・２０７

あめ生　１１０

荒井三重子　６２

荒井亮吉　１８５・１９４・１９７

荒木政次　１３１・１５２・１６８

アレクシス親王　４２

井伊家　１２４

井伊直憲　２０７

飯島家　４０

飯島佐之六（初世）　２０４

飯島六之佐（初世）　２９・３０

飯島佐十郎（二世）　３０

飯島六之佐（三世）　２９・３０・２０２・２０３・２０５

飯島六之佐・佐之六（四世）　３０・５１・５２・５４・２０９・２１０

飯島佐六（五世）　３０

飯島佐六・佐之六（六世）　１４・３０・４１・５１・５２・５４・５６・６０・６８・６９・７０・８３・９０・９１・１００・１０１・１０２・１０５・１０６・１１０・１１８・１２３・１３０・１３１・１３４・１３６・１３８・１３９・１４０・１４２・１４３・１４６・１４８

飯島佐六（七世）　９０・１０７・１３２・２２１

飯島六之佐・都生夫・佐六（八世）　３０・１３２・１３９・１４２・１４８・１５２・１５７・１６１・１６２・１６８・１７２・１７３・１７９・１９７・２１９・２２１

飯島佐之六・忠（九世）　３０・１６８・１７３・１７８・１８０・１８５・１８９・１９１・１９５・１９７・２２２

飯島大輔　３０・１９７

飯田巽　７２

飯森友男　１３２・１６８・１７３・１９７
飯森友春　１７３・１９７
伊右衛門　３３
伊賀屋九助（宝生九郎）　３９
五十嵐力　７４
池善平　１００
池内信嘉　３９・４４・４５・８１・９６・１０８・１２４・２１２・２１３・２１４
池田　４２
池田茂政　２０７
池田屋長次（五世諸橋権之進）　２５
生駒秀三　１０４
伊左衛門　３１・５１
石井有方　９０
石井家　２０３
石井勝左衛門（初世）　２０２
石井庄十郎（伝太郎）　２０２
石井仁兵衛　２０・２８・３０
石井孫兵衛　２０
石井孫兵衛一斎・景行（十世石井仁兵衛）　２０・４０・２０２
石井弥一　２０
石井弥兵衛（九世）　２０
石井景弘（六世）　２０
石浦他吉（宮増豊好）　２８・２９・１３１・２０５
石浦辰治郎　３３
石浦鉄雄（敷村鉄雄）　２９
石浦通宏（宮増豊好）　２１８
石川退介　１２４
石黒孝　１８５
石黒傳六　１３３・１４０・１４９・１５２・１５７・１５８・１７３・１７６・１７７・１９０・２２１
石黒与四郎　２６
石坂宇兵衛　１５９・１６８
伊左衛門　４９
伊三吉　２５
伊三郎　２５
井坂屋條九郎　２８
井崎屋（井筒屋）彦次郎（三郎）　２６
井筒屋逸吉　３０
井筒屋平右衛門　２６
石田清吉　６０・８３・９０・９１・１０２・１０５・１３１
石田幸男　１８０

石野新太郎　１５２・１６７・１６８
石橋忍月　７５
石橋和平　８８・９３・９４・９６・２１４
石原多賀子　１９８
石屋（石谷）伊左衛門　３１・１４０
石村進　１１５
泉薫（薫）　２１０・２１１
泉喜八　１６８・１７３
泉鏡花　２３・５９・１３９・２１９
泉小作　５８・２１０・２１１
泉清次　２３
泉房　２１０・２１１
泉松代　２１１
泉祐三郎　５７・５８・５９・６０・６１・６４・６８・２１０・２１１・２１９
泉屋茂助　２６
和泉元秀　２１
磯野政勝　６９・７０・８３
一噌又六郎　１２２
板崎弥一郎　１８６
市右衛門　２６
市三郎　３３
市兵衛　２６
市村塘　９３・１２１・１３０・１４０・２１４
市郎兵衛　２５
伊藤博文　８３
伊藤庸雄　１４０
伊藤弥兵衛　２５
伊東芳次　１９６
威徳甚左衛門家　２３
井上卯八　２５
井上吉太郎　２５
井上参議　４８
井上公　２０７
井上松次郎　１７９
猪之助　２５
今井幾三郎　１７２
今井竹二　９８
今尾始　２２０
今村素一郎　２５
今村直政　１０５

今村勇次郎　９３
岩井嘉樹　１９８
巌如春　２００
岩上茂平　６０・９１・１３１・２０３・２１４・２１９
岩倉公　２０７
岩倉贈太政大臣　２０８
岩倉具視　４２・４３・４４・４５・４６・７１・８０・２０８
岩倉（邸）　２１２
岩崎長世　６５
岩崎茂三郎　２５
岩村邦夫　１９６
上杉　４２
上杉知行　２１４
上田佐都子　１９６
上田治三郎　１５２・１６８
植田忠平　１４０・１５７
上野友次　１８５・１９０
上山市蔵　２８
上山吉十郎　２８
上山某　５４
魚住弘英　６０
宇作　２５
内田弘保　１９４
内海忠勝　１０３
藪野喜作　２１７
宇野邦夫　１８５
宇野親一　１６２
梅木生　１４２
梅田亥之吉　１３１・１４２・１５２
梅田甚三久　１０・２００
梅若万三郎　４６・１５４・２２１
梅若実（六郎）　４１・４２・４４・４６・４７・６７・１０５・１１４・２０６
梅若恭行　１８３
梅若六之丞　１８３
梅若六郎　１７２
漆矢多美吉　６０・６５・８２・９０・２１１
永吉　２５
英照皇太后　４３・４４・７４
栄操院　３５
栄次郎　２６

柄崎義英　１４１
江島伊兵衛（荏寺枚平）　３７・３８・９９・１００・１４３・２１６
エジンバラ公　４１・４３
越中屋栄次　１２
越中屋勘次郎　３１
越中屋五郎作　３２
越中屋作次郎　２８
越中屋捨次郎　２９
越中屋門次　２６
越中屋理右衛門　３１
江野泉　１９７
円次郎　３３
老田景教　１１１・２１８
老谷　２１８
大家七平　２１８
大浦嘉久太郎（宝雪）　７０・２１１
大浦嘉太郎　６９
大浦嘉門　５６
大浦次三郎　１２４
大浦屋太右衛門　２６
大江又三郎　１１５
大久保四郎　２５
大久保道三郎　２５
大久保信生　１１６
大久保茂作　２５
大蔵氏紀　１８
大蔵金右衛門　２１
大蔵源右衛門正重　２０３
大蔵庄左衛門家　１８
大倉家　１２４
大倉長右衛門　４２
大蔵庄左衛門氏紀　１８
大蔵八右衛門（二世成虎）　２１・２４・３１・３３
大蔵弥右衛門家　３１・１３５
大蔵弥太郎　１３５・１５１・１５６
大桑十左衛門　５１・５６・６８・６９・７０・８１
大桑辰雄　１４２
大崎弥一郎　２１８
大瀬甚平　２５
大瀬友太郎　２５

太田敬太郎　１４３
太田七兵衛　６４
太田忠久　１６８
太田南圃　５９・２１０
大田久太郎　１０５・１１５・１３０・１３１
大谷節子　２０２・２０７
太田屋宗次郎　２８
大坪喜美雄　１８０
大坪十喜雄　１５２・１５６・１６１・１６３・１６４・１６５・１６６・１６７・１７１・１７２・１７６・１７９・１８１・１８２・１８３・１８９
大友圭堂　１６２
大西隆二　１８０
大西亮太郎　１１１
大野定一　５２・６１・６９・７０・２０９
大野與三郎　１２４・１２５・１３１・１３８・１４０・１４２
大野屋七三郎　３１
大場幸九郎　３２・３３・３９・５２・７９・２０９
大場幸三郎　２４・３２・３３
大橋屋口三郎　３２
大平英教　５１・５２
大森市男　１８５
岡伊作　１４０
岡久兵衛　１９
岡次郎右衛門　１９・２０２
岡千蔵　１９
岡田与一　２００
小川太作　２５
小川屋三五　３１
小川屋豊右衛門　３０
荻田敬三　１５９
奥村家　１１９
奥村栄滋　６７・６８・８４・９３
奥村甚三　１３１
小倉正恒　１２３
小倉学　２０５
尾崎伊三郎　１３５
尾崎正作（伊平）　１３５
小崎正信　１９７
小野貢次　６９
小野義真　２１２

尾上始太郎　１１８
尾上新右衛門　２２
尾上張十郎（張重郎）　２３
尾上万次郎　２３・４２
尾上弥十郎　２３
尾上良十郎　３６
尾上良勇　４８
小原恒雄　１４２
小原芳二（猪平）　１１９・１２０・２１６
表章　１５・２０３・２１７
尾山庄五郎　５１
尾山屋（宅山屋）喜三郎　１２
折橋岩吉　２５
折橋弘二郎　２５
織部松州　２２０
尾張徳川家　１０８
改田與三八　１３１
加賀中納言　５０
加賀の千代女　１９１
柿本豊次　１１８・１３２・１３４・１５２・１６４・１６７・１７２・１７９・２１９
角谷勝淳　１１８・１３２
角谷雄次郎　９１・１０５・１０７・１３２・１６０
梶井幸代　１１・１４・３４・１７７・１９１・２２１
梶谷厚　１５５
柏原仁兵衛　２２０
糟谷宇左衛門　１９・２０
糟谷治郎九良　２０
糟谷次郎兵衛　２０
糟谷伝次郎　１９
糟谷彦三郎（狩野宗明）　１０４
糟谷彦四郎　２０
糟谷彦次郎　１９・２０
紬屋康助　２６
片岡憲太郎　１６１・１８０・１８５・１９１・１９５・１９７
片岡外與吉　２７・１０５・１２３・１３１・１３４・１３７・１４０・１４２・１５２・１５７・１６１・１６８・２１９
片岡吉雄　１４２・１５２・１６１・１６８・１７３・１８５・１８９・１９０・１９７・２２２
刀屋金作　３１
勝尾信景　５１
勝川円作　２５

勝吉　５１
桂井未翁　２０１
加藤勘蔵（子勘蔵）　１８・１９
加藤里路　５０・６３
加藤千勘蔵　１８
葛野市郎兵衛均定　２９・３１
葛野定睦（九郎兵衛）　１０２
金井章　１７９
金浦扇丈　１０７・１１８・１３２・１３５・１３７・１４０・１４２・１４３・１５２・１５７・１６０・１６１・１６４・１７３・２２０
金森孝介　１９３・１９６
金森秀祥　１８０
金屋（三須）清之助　２７
金子捨次郎（清作）　２１９
金子為次郎　５１
加納十次郎　２５
加納千吉　２５
加納与兵衛　２１８
狩野宗明（糟谷彦三郎）　１０４
嘉兵衛　２５
鏑木嘉太郎（六世佐之六）　３０・５１・５２・５４
紙屋甚蔵　２７
紙屋善右衛門（善左衛門）　２８
紙屋宗十郎　２８
紙屋藤蔵　２７
亀井俊雄　１１８・１４４・１５２・１６２
亀原理　１６８
河合幾次　２１８
川上政平　１９６
川岸一郎　１５４・１５５
川口久雄　６２・９８
河崎為直　９０・９１
河崎米次郎　１６７
川崎利吉（九淵）　１１８・１２２・１２４・１３２・１３９・１４４・１６２・１６４・２２１
川島英治　１９６
川瀬一馬　１４３・１４４・１８２
河東碧梧桐　４８
河原清　１８４・１９７
勘四郎　２９
観世清廉　８０・９９・１１４

観世清和　１９５
観世清孝　４０・４２・４４
観世黒雪　２５
観世権九郎豊好　２１８
観世左吉　２１・３１
観世新九郎家　２３・１０８・２１７
観世新九郎豊成　２８・４０・２１７・２１８
観世新三郎家　２０５
観世新三郎（湯浅勇三）　８３・１０８・１０９・１１８・１２２・２１０
観世新三郎豊重　２３
観世惣（宗）兵衛家（新三郎家）　２３
観世辰之助　２３・２１７
観世鐵之丞　２０６
観世豊好　２８・２０５・２１８
観世寿夫　１７０
観世元昭　１７９
観世元信　１６５・１６６・１８２・１８８・１８９
観世元規　３１・４０・９６
観世元則　１９７
観世元正　１７０・１８３
観世与左衛門　３０
勘蔵　３２
神田喜左衛門　１０３
勘之丞　３５
冠十郎　６４
冠勇次郎　６４
喜一郎　２８
喜右衛門　２６
菊地武成　５１
喜三郎　２８
寄嶋屋弥一　１２
北七大夫　２５
北春千代　１６・２０９
喜多実　１７０
喜多六平太　４２・８０・１１４・１５４・１６４・１９５
北川文右衛門　３１
北川屋仁左衛門　３１
北島公之　１９７
北白川宮　８１
北爪武久　１２４

木谷藤十郎　４９
木谷吉次郎　２１８
北村和夫　１９７
北村勘左衛門　２０
北村勘之丞　２０
北村魚泡洞　５０
北村千之丞　１９・２０
北村勉三　１０３・２１７
北村易吉　１１５
北村安之助　１９
吉助　３３
吉蔵　２８
吉太郎　５２
吉之丞　２８
亀千之助　２６
吉平　２６
吉郎　２８
吉郎兵衛　３２
鬼頭喜太郎　１７９
絹川豊　９０・１０５・１０７・１３２・１６０・２２２
喜兵衛　３３
儀兵衛　３３
木本捨次郎　１３２・１５２・１９９・２２０
木村雨山　１００
木村克巳
木村亀太郎　８３・２１１
木村杏園　１００
木村治一　９９
木村満寿男　１７３
木村よね　１４１・２０１
木屋僧之助　２６
久朔　２６
九助　３１
九田豊治　１８５
久太郎　３２
久平　３３
京屋五郎兵衛　２７
京屋百太郎　２７
京屋和三郎　１２
桐谷正治　９８・１１７・１１９・１２０・１２２・１２６・１３２・１３４・１３６・１３７・１３８・１３９・

１４１・１４４
金右衛門　２６
金三郎　２６
欽之助　２５
草野茂正之　５３
九条道孝　４４・４５
窪田流月　１１０
熊田源太郎　１４０
久米邦武　４３・４４・４５・２０７
久米之助　２６
蔵五郎兵衛（五兵衛）　１２
倉田喜弘　４１・２０６・２０７
グラント　４３・４４・４７・２０７・２１２
クレマン　７１
黒川屋重太郎　３１
黒田新（進）左衛門　１２
黒田長知　２０７・２１２
黒田吉夫　１５６・１５７・１５８・１６２
黒田立五郎　３１
九郎次　３１
九郎兵衛　３２
黒本稼堂　５０・２０６
剱崎屋太一郎　１２
源次　２６
元六　３１
小池靖一　９９・１２１
小泉米松　５１・２０９
小出屋久五郎　３２
幸昭弘　１８８・１８９
幸小左衛門　２０・２８
幸五郎次郎　１９・２８
幸五郎次郎正孚　２８
幸五郎次郎正能　２０
幸祥光（悟郎）　２８・１１８・１２２・１３４・１３６・１３７・１３８・１５２・１６１・１６２・１６４・１７３
幸清五郎　２０
幸清次郎　１９・２０
幸四郎次郎　２０
幸正彰（三須錦吾）　１６２
幸正員　１０４

好作　２６
幸次郎　２６
康助　２６
皇太子嘉仁親王（大正天皇）　１１１
鴻巣盛広　２１９
幸平　２６
小鍛冶剛　１１８・１２２
小坂外雄　１２０・１４２
越上理吉郎　９０・９１・１０５・１３１
越沢弥太郎　５１・５６・６９・９０
越沢　２１６
越野亥佐久　１３１・１８１
越野小平　５１
越野雪路　１３８
越山景春　１０５
越山隆　１５２・１６８
越山義光　１３１・１４１・１４２
小杉（菅波屋）次三郎　２７・３０・３９
小杉治三郎　２８
小杉次郎三郎　２８
小杉六三郎　２８・５１・５２・５５
小杉本助　５４
小杉八蔵　２８
小杉亮助　５４
小杉了祐（次三郎）　５１・５２・７０・２０９
小竹才六　５１・５２・５３・５４・５６・６７・６８・６９・８２・８４・８７・９０・９５・１０１・１０２・１０４・１０５・１０６・１１１・１１２・１１３・１１４・１１５・１１６・１１９・１３８・２０９・２１１・２１３
国京茂助　１１５
小槌重作　６０
小寺金七　２１・１５０
小寺五左衛門　２１
小寺佐七　２１
小寺俊三　２１
小寺長九郎　２１
小寺彦四郎　２１
後東八郎兵衛（八良兵衛・八郎平・後藤晴一）　２８・３５・３９・５１・５２・５４・６１・２０２・２１７
後藤祐自　１６
小中村清矩　２０７
近衛忠熙　７２

木葉天狗　１１０
小早川精太郎　１０７・１０８
小林輝冶　１５
小林責　２０９・２１７
小林彦松　１６７
駒三郎　３３
駒沢吉次郎　２５
駒沢惣吉　２５
小松了從　２１５
小松宮殿下　２１３・２１４
小松原勘　１０５・１１１・１１８・１３１・２０３・２１１・２１４・２１７
小松屋十蔵　２９
小松屋昌太郎　３１
小松屋專三郎　３１
小松屋專三　１７
小室藤一郎　１３３
米屋次六郎　２４・３３
小森家　２０３
子安峻　２１２
五郎兵衛　２８
金剛巌　１７０・１８３・１９５
金剛右京　４１
金剛謹之助　６６
金剛鈴之助　１１４
金剛唯一　４４
近藤乾三　１６１・１６２・１６３・１６４・１６６・１６７・１７０・１７１・１７２
近藤乾之助　１５１
近藤全宏　１７９
金堂大作　３９
金堂森之助（英八郎）　１３・２６
権藤芳一　２０２・２２２
金春氏勝　１８
金春勝成　２０３
金春吉右衛門　２０３
金春錦蔵　２０３
金春光太郎　１３５
金春三郎右衛門　２３・２９・２０３
金春三郎右衛門繁元　２０３
金春三助（三郎右衛門）　２０３
金春重勝　１８

金春鉄三郎　２３・２４・３０
金春伝蔵　２１・２３・２９・３０・３５・０３
金春信勝　２０３
金春信高　１３５・１７０・１９５
金春八左衛門安喜　１８
金春八郎安照　１８
金春広成　６６
金春又右衛門氏則　２０３
金春弥三郎　３６
金春弥七郎道寿　２０３
金春林太郎（惣右衛門国泰）　１１８・１２２
紺屋新治郎　３１
紺屋与市郎　１７・２８
紺屋与五平　３１
犀川小太郎　１２４・１２５・１３１・１４２・１５２・１６１・１６７・１６８・１７２・１７３・１７５・１７６・１８０・１８５・１９０・１９２
斎田喜一郎　１０７
斎田甚四郎　２３・２９
斎田千十二（永太郎・敷村徹之助）　２９・３９・５１・５２・６０・８３・８４・１０１・２０４・２１４
斎田常三郎　２３
斎田常次郎　３０・１４３
斎田恒之助　２３
斎田半次郎　２１９
才田屋六兵衛　１１４
嵯峨逸平　１７５・１７６・１７７・１８５・１９２・１９５・１９６
嵯峨保二　１５７・１５９・１７９
坂井（藤田）昭　１５２・１６８
酒井明　１８５
坂尻屋珈涼　２９
坂尻屋五五　２９
坂田吉男　１６８
相良歩　１４０
鷺権之丞　２１３
鷺二右衛門　２４
佐吉　２５
作右衛門　５１・５２
作太郎　５２
作兵衛　２６
佐久間寛台　５７
佐久間盛之　５７

佐久間夢裡　５７・５９・７３・７４・７９・８０・８６
桜井宅次　２５
桜井弥三次　１２
桜井弥三治　３１
桜間金太郎　１５０・１８３
桜間伴馬　１０５
桜間道雄　１５０
桜間龍馬　１５０
佐々木英一　１８５・１９２・１９３・１９６
佐々木権次郎　１６８・１９７
佐々木参議　４８
佐々木寿六　２１
佐々木又吉　２１
貞光義次　１６３
佐藤芳彦　３７・４７・４８・８８・９８・１０１・１０３・１４０・１４３・１６７・１７２・２００・２０４・２０８・２１４・２１８・２１９
里村五右衛門　２３・３０
里村半三郎　２３
佐野巌　１３・３５・５６・６２・１１５・１２１・１２４・１２５・１２６・１３０・１３４・１３６・１３７・１３８・１４１・１４２・１５２・１５６・１５７・１５８・１６１・１６２・１６４・１６５・１６６・１６７・１６８・１７１・１７３・１８２・２０６・２１０・２２０
佐野吉之助（初世）　１３・１５・４０・４８・５５・５６・５７・５９・６０・６１・６５・６７・６９・７０・８１・８２・８３・８４・８５・８７・８８・８９・９０・９１・９２・９３・９４・９５・９６・９７・９８・９９・１００・１０１・１０２・１０５・１０６・１１０・１１２・１１３・１１４・１１５・１１６・１１８・１２０・１２１・１２２・１２８・１３０・１３１・１３２・１３３・１３６・１３７・１３８・１４８・１５８・１６０・１７１・１７２・１７３・２０８・２１０・２１１・２１２・２１４・２１６・２１８
佐野吉之助（二世）　１４・１５・５５・５６・６０・６２・８２・８３・９０・９７・９８・９９・１０１・１０５・１０６・１０８・１１１・１１３・１１４・１１５・１１６・１１８・１２１・１２２・１２３・１２４・１２５・１２６・１２９・１３０・１３２・１３３・１３４・１３６・１３７・１３９・１４０・１４１・１４２・１４３・１４５・１４６・１４８・１４９・１５１・１５２・１５３・１５７・１５８・１５９・１６０・１６１・１６２・１６４・１６５・１６６・１６７・１６８・１６９・１７０・１７１・１７２・１７４・１７９・２１０・２１８・２２０・２２１
佐野金次郎　１０８
佐野金太郎　６５
佐野座主　１３０
佐野貞子　２２０
佐野正治　１５２・１５９・１６２・１６６・１６７６・１６８・１７１・１７２・１７３・１７６・１７７・１７９・１８０・１８１・１８２・１８３・１８５・１８６・１８７・１８９８・１９０・１９６・２２２
佐野萌　１５１・１５２・１６７・１６８・１７１・１７２・１８１・１８２・１８８・１９１・１９６・１９９・２２２

佐野平六　１０８・１２３・２１７
佐野雅英　１９９
佐野安彦　１４・１５・５６・６０・６１・６３・８３・８４・８５・９１・９６・９８・１０５・１１８・１２１・１２３・１３０・１３１・１３４・１３６・１３７・１３８・１４０・１４２・１４３・１４６・１４８・１４９・１５１・１５２・１５５・１５７・１５８・１５９・１６０・１６１・１６２・１６５・１６７・１６８・１６９・１７０・１７１・１７２・１７３・１７４・１８１・１８９・２１０・２１１・２１４・２１８・２１９・２２０・２２１・２２２
佐野吉昭　１６５・１６７・１７１・１７２・
佐野由於　１６７・１７６・１８２・１９０・１９３・１９５・１９６
佐野若子　１５４
沢村直喜　１３２・１４２
三右衛門　３１
三条実美　７１・２０８・２１６
次右衛門　２６
塩谷甚作　３１
塩屋金助　３１
塩屋幸蔵（耕作）　１２
鴫原清兵衛　９０
敷村兼雄　２９
敷村嘉六郎　２４・２９・３０
敷村清蔵　２３・２９・３５・３９・２０３
敷村善六郎　２４・２９
敷村（斎田）竹之助　２３・２９
敷村辰之助　２９
敷村千十二　５４・２０３・２０５
敷村鉄雄　２９・１０８・２０５
敷村鉄太郎　２９・９０・１０５・１１１・１３１・２０３・２０５・２１４・２１７・２１９
敷村徹之助（土屋永太郎・斎田千十二）　２９
敷村彭助　２４・２９
敷村道子　２９
重近　５１
重野安繹　４４・４５・２０７
茂山吉次郎（大蔵弥太郎）　１３５
茂山久治（善竹弥五郎）　１３５
茂山家　１３４
茂山七五三（四世千作）　１６３・１７０
茂山社中　６６
茂山千五郎（三世千作）　１６３・１９５・２２２
茂山千五郎家　１３５
茂山千之丞　１６３

茂山忠一郎　１３５
茂山忠三郎家　１３５
茂山忠三郎（四世）僥一　１３５・１５１
茂山忠三郎（二世）良豊　１３５・２１３
茂山忠三郎（三世）良一　１３５・１３６・１５１
茂山良介　１３５
次五郎　５２
次左衛門　２５
次作　３２・５１・５２
次助　２５・２６
重之助　２５
重平　５２
紫人　１１０
七郎左衛門　２６
篠原清次郎　２２０
柴野美啓　１０・２０２
嶋崎徳平　４９
島田九十郎　２３・３５
島田蔵多助　３５・３９
島田源蔵　２３
島田十助　２３
島田磨佐記（万佐喜）　５１・５２・５４・５５
島田百千万　２３
島村明宏　１９２・１９３・１９６
島村巌　１４６・１５２・１６７・１６８・１７３・１８０・１８２・１８５・１９０・１９２・１９４・１９６・２２２
島村佐平　４０・１０３
島村平次　１２４・１３１・１４０・１４２・１５２・１５７・１６１・１６７・１６８・１７５・１７６・１７９・２１８・２２１
嶋屋藤蔵　２７
清水梅雄　２１１
清水九瑋　１５１・２２０
清水敬次郎　６４
清水助九郎　３１
清水沖一郎　１０１・２１４
清水宗治　１９７
清水八百吉　２１６
清水与三郎　８３
清水屋半之助　２６
志村信郎　１９６

寂照　４６
曲見平太（日置謙）　８９・１０６・１０９・１１０
周延　４７
十五郎　３１
十三郎　２９
十助　２９
十六　３１
春藤勘右衛門　１９
春藤熊之助　１９
春藤万右衛門　１９
春藤口右衛門　１９
春藤六右衛門　４２
春藤六郎助　１９
ジュック・ウェトウインブルグ親王　４１
庄九郎　２５
庄五　５９
庄左衛門　２５
尉助　２８
庄田次郎（良）米　５１・５２
庄田晴幸　２１７
正田夏子　１６・２０９
昌太郎　３１
庄八　２６
庄兵衛　３２
ジェノヴァ公　４２
白尾屋又左衛門　２９
白崎孝和　１９７
白山捨吉　６０・８３・９０・１０５・１０７・１１８・１３２・１３５・１３７・１４０・１６０
次郎　４９・５１・５２
次六郎　３２
次郎作　３１
次郎兵衛　３２
甚右衛門　２５
神宮鍈次　１３１
甚九郎　２６
甚作　２６・３０
甚五郎　２６
甚三郎　２６
新七　３３
晋総　５１

新谷亮　１３１
甚太郎　３１
進藤一子　１０７
信之助　２６
甚之助　３１
甚兵衛　３３
新保弥一郎　１０５・１３１・１３４・２０５
神保八左衛門　１０
新保与一郎　１５９
神武天皇　６６・１４１
真龍院　３５・２１７
菅原道真　９５
菅波屋次三郎　２７
須川屋太郎次　３２
杉治郎助　２０２
杉長左衛門　１９
杉弥兵衛　１９・２０２
杉浦友雷　１７３
杉江秀直　６０・６１・６９・７０・９０・９１・１０５・１１１・１３１
杉本吉九郎　２６
杉本丈次郎　２６
杉本実　１９６
杉山三郎左衛門　２５
助四郎　２６
助次郎　２６
鈴木恵淳　２１２
鈴木紀子　１６０
寿原勇三郎　５３
炭哲男　１９３・１９４・１９７
住駒昭弘　１９７
住駒明弘（勇吉）　１６７・１７３
住駒俊介　１９７
住駒幸英　１６・１８０・１８５・１９１・１９５・１９７・１９９・２０５・２２２
住駒陽介（政次）　２７・６１・１３１・１３４・１３７・１４０・１４２・１５２・１５７・１６２・１６７・１６８・１７０・１７２・１７３・１７５・１７７・１８０・１９０・１９７・２２１
寿美田与吉　６４
世阿弥　１６９
清右衛門　３２
清五郎　２６
清三郎　２６

清七　３３
勢次郎　２６
清兵衛　３２・５６
清六　２８
関岡長右衛門　９９・２１５
瀬尾　２１１
瀬尾要　５１・９８
瀬尾潔　１３４
瀬尾健二　２２０
瀬尾乃武　１８２・１８８
瀬尾平也　５１
瀬賀尚義　１９７
千章修　１８５・１９４・１９６
善四郎　３３
全蔵　２５
善竹弥五郎　１３５・１７０
善兵衛　２６
惣吉　２５
宗五郎　２８
宗助　２８
荘太郎　３１
惣之輔　３２
宗兵衛　２６
相馬克巳　１８１・２１０
相馬勝之（諸橋権之進）　３９・４０・４９・５１・５３・５４・５５・５６・６１・６７・６８・８７・１２１・２０９・２１０
相馬五十八郎　１２１・２１０
相馬陸吉　３９・２１０
相馬陸平　３９
滄浪　７５・７６・７７・７８・２１３
曽我廼家蝶六　１６０
則至　５１
素谷篤爾　１４０
外次郎　２８
太市郎　３２
太右衛門　２６
太吉　２５
鷹誠一　５１
高木秀綱　６０・６９・７１・８１・８７・９０・１１４
高島弥五郎　１３・３２・５２・５４・８１・８７・１０４・１０５・１０６・１０７・１０８・１１０・１１１・

２０９・２１３・２１７
高島弥兵衛　１０６
高橋進　１２５・１７０・１７１・２２１
高橋右任　１８０・１８５・１９２・１９４・１９６
高浜虚子　１６５
高広次平　２２０
高安滋郎　１５３・５８・１６２・１７９・２０２
高柳俊男　１３１・１４２・１５２・１６６・１６８
隆由　５２
宝橋次郎三郎　２５
田川雅章（孝治）　１３１・１４２・１４６・１４９・１５２・１６７・１６８・１７２・１７３・１７５・１９０・２２１
滝井孝作　４８
滝沢馬琴　２０７
竹内新太郎　３１
竹内信二郎　６９・７０
竹内与五平　３１・５２・５４・６９・７０・２０２
竹内与三郎　３９
竹内屋次右衛門　１２
丈九郎　２６
竹腰健造（健三）　１１４・１５８・２２０
武十郎　２６
竹田久八郎　５３
武田光雲（喜男）　９８・１１７・１２２・１４１・１４３・１４４・１５１・１６７・１７０・１７１
竹田権兵衛　１７・１８・１９・２０・２４・２６・３９・４１・７９・２０２
竹田武　１６８
竹田（金春）広貞　１８
竹田（金春）広富　１８
竹田（金春）安忠　１８
竹田（金春）安胤　１８
竹田（金春）権兵衛（初世）安信　１８
竹田（金春）権兵衛（五世）安顕　１８
竹田（金春）権兵衛（六世）安居　１８
竹田（金春）権兵衛（七世）安得　１８・４０
竹田与五平　２００
竹田与八郎　５４・５６・５７・６０・６１・６２・６８・６９・９０・１３１
竹中俊太郎　１３・２６・３９・５１・５２
竹中甚助　１３・２６・５６
竹中新太郎　５４
竹中弥十郎　２６

武部謙作　１１９
太宰春台　７８
田崎隆三　１８０
太三郎　２５
太助　２６
多七　２７
多田順子　１９７
畳屋九郎兵衛　３２
畳屋七三郎　３２
畳屋理三郎　３２
多々良外茂三　１０７・１３７・２１７
橘屋栄太郎　１０５・１３１
辰之助　２５
辰巳啓　５９
辰巳孝一郎　９０・１０１・１１５・１１９・１２０・１２３・１２４・１２５・１２６・１３１・１３２・１３４・１３７・１３８・１６２・１６３・２２０・２２２
辰巳孝太郎　３１・８３・９０・９１・１０５・１３２
辰巳才一郎　１３１・１３３・１３４・１３９・１４２
辰巳孝　１４９・１５６・１６２・１６７・１６８・１７２・１７６・１８１
巽龍雅　１２６
辰巳米吉　１２１・１３３・１４０・１５７
立野善吉　１６８・１９７
田鶴浜屋昌次郎　２７
田中重信　１００
田中喜男　２１３
田鍋惣太郎　１５２・１５３・１６２・１６５
谷精一　１３１
谷太良次　５１・５２
谷文太郎　５６・６９
谷真澄　９０
谷岡少佐　７１
谷口喜三郎　４０・２０３
谷口正喜　２０３
田畑孝正　１３１
太兵衛　３２
玉井敬泉　１３３
玉川博　１６・１８０・１８５・１９２・１９３・１９６・２２２
田宮義男　１６７・１６８
田守太兵衛　１４０
田屋邦夫　１８５・１９６

太郎左衛門　３０
太郎次　２６
近田太三郎　１００
近八郎右衛門　９９・１００・２１６
知明屋九六　２８
茶之木屋節堂　１００
忠左衛門　２６
仲三郎　２９
忠七郎　２６
中條薫　１５
中条屋紋之助　２６
辻源八　２１
辻三郎　５１
津田喜市　１３１・１４０
土田他吉郎　６０・９０・９１・１０５・１０７・１１８・１３２・２１０
土林亥太郎　２５
土屋亥太郎（林樹八郎）　１１９・２０１
土屋永太郎（敷村徹之助）　２９・３５
土屋長五郎　２９
筒井伝七　６０
常五郎　２５
常之助　２５
角嘉一　１５２・１５９・１６８
角嘉祐　１６８
敦賀屋市兵衛　２８
敦賀屋吉十郎　１２
鶴来屋庄吉　３２
鶴見秀　１９２
寺井三四郎　２１９
寺井政数　１６７・１９７
寺田次作　６９
寺田（穴田）成秀　１９２・１９３・１９６
寺西成器　２１８
伝助　２６
伝兵衛　２５
硎次一郎　２２０
藤右衛門　２６
藤吉　２６
藤二　２８
東田政吉　６４

藤堂和泉守　５７
藤堂高潔　４４
藤八　３２
堂本正樹　１０３
富樫氏　２４・５５
土岐儀　１０７
徳川家康（内府）　９・７８・２１２
徳川家　４２・２０７・２１３
徳川綱吉　１９
徳川慶喜　４０・２０７
徳田与作　１９７
篤太郎　２６
徳太郎　２７
ドナルド・キーン　１８１
殿田音三郎　６９
殿田喜太郎　６０・８３・９０・１０５・１１８・１２３・１３１・１６６・２２１
殿田謙吉　１８９・１９７
殿田源二　６０・１３１・１３４・１４０・１５２・１５７・１６５・１６６・１６８・２０４・２２１
殿田善兵衛　３９
殿田保輔　６０・１５２・１６６・１６８・１７２・１７３・１８０・１８２・１８３・１８５・１９０・１９１・１９７・２０４・２２２
殿田良作　３２・１０５・１６６・２０１・２０４・２１０
殿村与作　１３２・１３５・１４３・１５２・１６０・１６１・１６３・１６８・１７３・１７５・１７６・１８０
戸水汪　１１４
戸水万頃　１１４・１２０・１２１・１２６
友作　５１
登茂作　２６
供田清作　１８５・１９６
豊左衛門　２９
豊田（氷見屋）太郎左衛門　３０
豊臣秀吉（豊公）　３８・６２・７４・７８・２１２
虎次郎　２８・５１・５２
内藤　４２
直江勘七　２２２
直江権作（服部弥五郎）　２４・２５・２６・２０３・２０４・２１４
直江権三郎　２５・２６・２０２
直江八十松　２５
長尾一雄　２０５
中川忠蔵　１８・１９・２０２
中川友三郎　２６

中川護　１９６
中川猶吉　１９・２６
中島鎮　１５７
中島徳太郎（雄吉）　１４０・１５３・１５７・１９０・２２０
中島（普照寺屋）勇吉　３０・７０・９１・１０５・１１１
中島勇吉　３１・５１・５２・６９・８３・９０・１０４・１０５・１０６・１３２・２１０
長島真男　１３２・１３４・１５２・１６８・２１９
長島勇吉　５４
中島屋長次郎　２８
長瀬成太郎　４８
中田猪之助（万三郎・豊喜）　２３・３０・３５・３６・４０・５１・５２・５４・２０３
中田きん　２１９
中田（松本）金太郎　２３
中田新之助　３０
中田鈴　２３・２１９
中田惣之助（孫惣）　２３・３５・３６・５４
中田豊作　３９
中田万三郎（仙助）　２３
永田斉　１５９・１６８
中滝昇　１００
中谷明　１８８
中斎屋全蔵　２８
中斎屋（湯浅）平次　２８
中斎屋勇蔵　２８
中斎屋勇之助　２８
中西陽一　１７７
中野岩太　１１６
中野隨卿　１０１
中野武営　２１８
中野茗水　１０１
長野与平　２２０
中林吉左衛門　２３
中林彦四郎　２３
中林兵二　３０・３１・８３・９０・１０５・１１１・１３２
中林山三郎　２３
中宮茂吉　１４０・２１６
中宮義一　２２０
中村逸夫　１９７
中村吉兵衛　２１
中村庫太　６３

中村禎雄　１５４・２０４
中村噌庵　１９
中村主膳正度　６３
中村藤造（藤左衛門）　３２・５１・５２・５６・６０・６９・７０・８２・１０７・１３２・２１３
中村博　１９２
中村宗雄　１９７
中村錄之進　１０５
長村兵蔵　１９
長村八三郎　１９
中屋宗之助　３１
中屋彦十郎　４８
中山純一　１０５・１１５
中山為利　９０
中山誉吉　１５２
永山貞秀　６４
夏目漱石　１５・１１８
鍋島憲　１９７
波吉　４１・６７・１４５・２００・２１１
波吉（四世）伊右衛門信秀　２５
波吉（六世）右内信重　２５
波吉宮門（久門・紅雪）　１０・１３・１７・２４・２５・３５・３８・４０・４６・５２・５３・５４・６１・７９・８０・８６・８７・８８・９５・９７・１０１・１０２・１１５・１２２・１２９・２００・２０２・２０８・２０９・２１７
波吉宮門　２５・１６８
波吉宮門信明　２０９
波吉五郎兵衛　２４
波吉（五世）左平次信興　２５
波吉（三世）左平次信安　２４・２５・１１０
波吉尉三郎　２４
波吉尉次郎　５３
波吉甚次郎　１２・２４・２５・３５・３８・４９・５１・５２・５３・５４・６１・７９・８０・８６・８７・８８・２０８・２０９
波吉甚次郎　２５・３９
波吉外次　１２２・１２９・１４３
波吉竹次郎　２０９
波吉トモ　２０９
波吉信和　１６８
波寄（初世）信安　２５
波吉初次郎　１３
波吉万十郎　２４・３５・３８・５１・５２・５３・２０９

波吉八音　２４
波吉（二世）喜之尉信治　２５
波吉陸之丞（諸橋権之進）　２５
成田金三郎　３１
南部　４２
南部祇知　２００
二木清次郎　２５
西一祥　２２２
西幸吉　１０５
西哲生　２０２・２０３・２０４
西田三好　１６７・１６９・１７０・１７１・１７３・１７６・１７９・１８１・２２１
西永公平　９３
西野春雄　１９９・２１５
西村欽也　１６２・１７９
西村孝作　６０・９１
西村聡　１６・１９８・２１３・２２２
西村弘敬　１５３
西村（佐野）若子　１６８
二宮哲雄　２１３
仁兵衛　２５
丹羽鉄三郎　１０５・１３１・２１７
丹羽長秀　２５
縫屋多助　２７
根岸理子　５８
能久　５９
能久治　９３
能与作　１４１
苗加登久治　１６・１８０・１８５・１８９・１９７
能口多作　１３１
野口敦弘　１８３
野口兼資（政吉）　９７・９８・１０５・１０６・１１７・１１８・１２２・１２５・１２９・１３６・１３７・１３８・１３９・１４１・１４３・１４４・１４６・１４７・１５１・１５２・１５６・１５８・１６１・１６２・１７２
野口（畳屋）九郎（九郎兵衛）　３２・４９・５１・５２・１０６・１０７・２０９
野口次郎吉　３２
野口登美男　１７２
野口文作　１０６・１０７・２１７
野尻哲雄　１９７
能登屋可吉　２８
能登屋勘之助　３１

能登屋太作　２６
能登屋茂三郎　２６
野々市屋長九郎　２６
野々村戒三　１６・２０１・２０２・２１３・２１７
野間善左衛門　１０７・１０８
野村（能村）晶人　１８０・１９３・１９７
野村いく　３７
野村（能村）英丘（祐丞）　１６・１６８・１７３・１８０・１８１・１８３・１８５・１９５・１９７・１９９・２２２
野村栄次郎　６０・６１・８３・９０・９１・１０５・１３１
野村九八郎　１３・２６・３７・２０６
野村諭　１４９
野村重蔵（重三・重太郎）　１３・２６・３５・３７・３８・４０
野村庄次郎　３２
野村四郎　３２
野村捨五郎　３２
野村又三郎　１０７・１７９
野村又三郎信英　１０８
野村松三郎　３２
野村万斎（武司）　３２
野村万作　３２・１８０
野村万介（九世三宅藤九郎）　１０８・１２３
野村万之介　３２・１８０
野村万蔵家　４０・１０７・１９６・２１０
野村万蔵（六世）　３２・１０８・１２３・１２４・１３５・１５０・１５６・１８０・１８１・１８２・１８３・１９６・２１７
野村万蔵（七世。萬・万之丞）　３２・１２４・１５０・１６３・１６４・１６５・１６７・１７２・１７５・１７６・１７９・１８０・１８１・１８２・１８８・１８９・１９５・１９７・２２１
野村万蔵（二世）品常　３２
野村万蔵（三世）直英（源之助）　１２・３２・１０７・１９７・２１７
野村万蔵（初世）保尚　２１・３２
野村万蔵（四世）義比（万造）　１３・３２・３９・４９・２０９・２１７
野村万造（五世万蔵。万斎）　１４・１５・３２・４９・５１・５４・８１・８５・８７・１０５・１０８・１２３・１３２・１３５・２０９・２１３・２１７
野村万之丞　３２
野村万之丞（耕介）　３２・１８０・１９５・１９７
野村万之丞（準四世）　３２
野村万之丞為常　３２
野村万禄（野村純・佐野平六）　１０８・１２３
野村万禄（史高）　３２

野村安之助（宝生嘉内）　１８・２２・２６・３６・３７・３８
能村祐丞（又次郎）　１６８・１７３・１８０・１８２・１８３・１８６・１８７・１９０・１９７・２０４・２２２
野村与左衛門（八田屋与十郎）　３２
野村与作　３２・４２・４７・４８・５４・８１・８７・１０８・２０８・２０９・２１０・２１３・２１７
能村芳雄　１４２
野村与十郎（良介）　３２・１８０・１９７
野村蘭作（安之助・直五郎）１３・１８・２２・２６・３５・３６・３７・３９・４０・４１・５０・５３・５４・５６・６０・６１・１４９・１７２・２０４・２０６・２１７
袴屋喜太郎　３１
袴屋次助　２６
袴屋又三郎　２６
萩野瑜（二世野村蘭作）　３７
橋喜兵衛　６１・９０・９１・１０５・１１１・１３１
橋房喜　１３１・１３４
橋本幸蔵　９９
長谷川斯謡生　１１０
長谷川孝徳　１９８
畑富次　１１５・１６８
畠山一清　１５１・１６２・１６４
畑中吉紘　１６８・１７３・１８０
八田健一　２０２・２０５
服部嘉内　４０・５０・１０３
服部恒男　１８０・１８５・１９２・１９６
服部弥五郎　２４・２６・８０・１４３・２０４
服部安太郎　３９
服部安之助　３７
花岡靖明　１４２
英安吉　６４
林吉太郎　１５０
林欣一　１８５
林小里　５８
林寿三郎　５７・５８
林樹八郎（寿八郎・土屋亥太郎）　５１・１１９・２０１
林猛　１４９
林豊寿　１６８・１７３・１９７
林直庸　７２
林屋三八郎　２８
林屋彦三郎　２８
原外喜男　１３１

原与一郎　１１５・１４１・１４２
半左衛門　３３
半之丞　３１
檜垣勇　１９７
檜常之助　２１５
疋田文一郎　１６７
彦五郎　３１
彦朔　２５
土方久元　７１・７２・２０７
日野中教正　４９
氷見屋太郎左衛門　３１
表具屋弥三兵衛　１０５・１３１
日吉貞次郎　３６
平岩嘉兵衛　１９
平岩勘七　１９
平岩親好　１９
平木豊男　１９７
広海仁三郎　２１８
広島克栄　１９６
広村亥左男　２１４
フォン・デッケン　４９
福王茂十郎　１５９
福岡聡子　１９６
福島杏山　１２５
福田松園　１６２
福富岩勝　１３２・１３７・１４２・１５２・１６０・１６８・１７３・１８０
藤井準夫　１００・２１６
藤井芳松　２１３
藤江又喜　３２・６０・８１・８３・９０・９１・１０６・１０７・１０８・１１０・１１８・１２４・１２６・１３２・１３５・１６０・１６４・２１７
藤岡外次郎　９０
藤城継夫　１４８・１９５・２０７・２１８
藤田昭　１６８
藤田大五郎　１３４・１６２・１６６・１７２・１７９・１８２・２０４・２０５
藤田（藤屋）多賀（嘉）蔵　１４・２７・２８・５５・５６・６０・６８・６９・７０・８３・９０・１０５・１１８・１３４・２０４・２０５・２１０・２１９
藤田（藤屋）多喜次郎　１２・２７
藤田多喜平　２７
藤田多七　２７
藤田多助　２７

藤田福夫　１４・１５・６３
藤田蓬壺（政次郎・正信）　５２・５５・５６・６０・６１・８３・９０・１０５・１１０・１３１・１３４・２０６・２０８・２１０・２１７
藤田昌次郎　２７・２８
藤田又八　６９・７０・９１・１３１・１３４
藤田了助　１０７
藤田六郎兵衛　１５２・１５３・１６２・１７９
藤野濤平　１１７・１１８・１２２
藤村善二　２１６
藤本清章　３１
藤本純吉（太次郎）　３０・３１・３５・４０・８３・１１１・１２３・１３０・１３１・１３２・１３４・１３７・１４０・１４３・１４４・１４６・１６１・２１０
藤本生五郎　２３
藤本（二世）太左衛門　３１
藤本（六世）太左衛門　３１
藤本太左衛門（長右衛門）家　２３・１３２
藤本（四世）太左衛門清雄　３１
藤本太左衛門清政　２４・３０
藤本（五世）太左衛門（太一郎）　３１
藤本太左衛門正敷（吉三郎）　３１
藤本太次郎　２４・３０
藤本（三世）長右衛門清方　３１
藤本（七世）長右衛門清直　３１
藤本長右衛門長三（長造）　２４・３０・３５・３９・５１・５４
藤本長次郎　３０・３１
藤本長次郎清因　３１
藤本等八郎　２３
藤本徳三郎　３１
藤本徳太郎　２３
藤本森助（登喜）　３５・３６・４２・２０６
藤本養五郎正甫　２３・３１
藤本養助正吉　２３・３１
藤原濤平　９８
二日市屋甚作　３１
船越健一　２０２
古厩忠夫　７３
古川久　４４・２０７
古沢粂吉　１２・３１
古沢幸助　３１
古沢恒之丞　３１

古沢八三郎　３１
古沢屋桂次郎　３１
文作　３２
文次　３２
文次郎　２５
文太郎　３１
平作　３２
平四郎　２８
兵次郎　３０
平助　３３
兵三　５１・５２
平太郎　５１
日置謙　１３・５９・６１・８９・１０９・１１２・１１３・１１５・１１６・１２１・１４１・１４３・２００・２０１・２０６・２１０
日置三次　３１
日置長左衛門　３１・３９
日置初太郎　３１
日置陸奥夫　１２３・１４０・１４１・１５７・１６２
芳春院　１１７
宝生氏勝（斎宮）　２２
宝生嘉内（安之助）　１８・２２・２６・３５・３６・３７・３９・４０・７９・１０２・１０４・１１１・１１２・１１７・１２２・１３８・１４３・２０６・２１７
宝生閑　１８３・１８８
宝生吉太郎　２２・３７
宝生吉之助　１８・２２・２４
宝生公恵　１６６
宝生金五郎　４８・８７
宝生九郎知栄（石之助）　２２・３６・３７・３９・４０・４２・４３・４４・４６・４７・４８・５３・６７・７１・７９・８０・８１・８７・８８・９７・９８・９９・１００・１０１・１０４・１０５・１０８・１１２・１１４・１１７・１１８・１１９・１２０・１２２・１４３・１４６・１５５・２００・２０５・２０６・２０７・２０８・２１３・２１４・２１５
宝生九郎重英（英勝）　２２・３７・５６・９９・１０３・１０４・１１３・１１４・１１７・１１８・１２０・１２２・１２４・１２５・１２６・１２９・１３０・１３２・１３４・１３５・１３６・１３７・１３８・１３９・１４１・１４２・１４３・１４４・１４５・１４６・１４７・１４８・１４９・１５１・１５２・１５６・１５７・１５８・１６１・１６２・１６３・１６４・１６５・１６６・１６７・１７０・１７１・１７２・１７５・１７６・１７７・１７８・１７９・１８３・１８９・１９６・２１７・２２１
宝生権五郎邦保　２２・１４３
宝生主馬　２２
宝生将監　２１６
宝生新　１１７・１１８・１２２・１３４・１３６・１３７・１３８・１４１・１４３・１５２・２２０

宝生新朔　４６・４８
宝生新之丞　２３・２０４
宝生宗家　１１３・１２５・１４３・１６９・１８１・１９９
宝生丹次郎　２２
宝生千代子　３７
宝生常三　８７
宝生哲（彰彦）　１５２・１８２
宝生とも　８０
宝生友勝　２２
宝生友精　２２
宝生友春　２２
宝生友通　２２
宝生友于（紫雪・弥五郎）　９・１３・１４・２２・２４・２６・３７・４０・５３・５５・８０・９９・１００・１０１・１１８・１３８・１４２・１４３・１４４・１４５・１４６・１５４・１５７・１７８・１７９・２００・２０１・２０３・２０４・２１５・２１６・２１９
宝生暢栄　２２
宝生彦三郎（錬三郎）　２３
宝生ふさ　８０
宝生英雄　２２・３７・１１４・１３６・１４１・１４３・１４９・１５２・１５６・１５８・１６１・１６２・１６３・１６４・１６５・１６６・１６７・１７０・１７１・１７２・１７６・１７８・１７９・１８１・１８２・１８３・１８８・１８９・１９６・２２１
宝生英照　２２・３７・１７０・１８２・１８３・１８７・１８９・１９２・１９５・１９６・２１９
宝生英正　２２
宝生（光本）弥一　１４１・１４３・１５２・１６４・１６５・１８３
宝生弥三郎明喬　２２
宝生弥三郎勇祥　２２
宝生良勝　２２
北条時敬　６０・９３・９４・２１４
坊城俊政　４４
法邑他喜男　１３１
細川　４２
堀麦水　２５
堀長治（六世諸橋権之進）　２５
堀井仙助　５７
堀屋寿助　２６
本荘宗秀　６３
本多政重　８１・８３・
本多政均　８１
本多政以　６７・８１・８３・８４・１１５
本保令儀　５１・５２・２０９

本間友英　１６８
本間広清　９９・１０１・１１９・２１７
前田家（前田公・前田侯・前田侯爵家）　７６・７９・１０５・１０６・１０８・１１４・１１７・１４３・１４４・１４５・２０２・２０３・２０４・２０７・２０８・２０９・２１４・２１６
前田式部　１００
前田繁　１８５
前田大納言　２１２
前田孝雄　１９７
前田弾番　９
前田綱紀　１９・２２・２５・２７・２８・３０
前田利家　２５・５０・６６・７８・８４・８５・２００
前田利鬯（青雪。子爵）　１２・１５・４２・４４・４６・４７・４８・５０・５３・６３・７１・７２・８４・８６・８７・８８・９５・１００・１０１・１０２・１１２・１１６・１１７・１２０・１２２・１４３・１８７・２００・２０７・２０８・２０９・２１４・２１６
前田利嗣　４６・４７・６７・８４
前田利常　１１・１８・１９・２５
前田利直　９５
前田利長　２５
前田利為　１０４・１０５・１１６
前田利治　１０４
前田利保　９９・１００・２１５
前田斉広　１４
前田斉泰（中納言様・梅叟公）　９・１２・１５・３４・３５・３６・３７・３８・３９・４２・４４・４５・４６・４７・４８・５０・５１・５２・５４・５８・７１・７９・８０・９３・１１６・２００・２０１・２０４・２０５・２０６・２０７・２０８・２１５・２１６・２１７
前田正民　１６８
前田道貞　１４０
前田光高　３０
前田吉徳　２９
前田慶寧　１２・３１・３４・３５・３６・３８・３９・４６・６７・６８・２０５・２１５
前西芳雄　１９９・２０２
牧野唯士　１９７
孫太郎　２６
孫六　２６
正木九八　９０・９１・１３１
政次郎　２７
増田秋雄　１８０・１８５・１９３・１９４・１９７
益田夕雲　２５
増見仙太郎　２１９
増見林太郎　１１７・２１９

増山幸作　２０９
又吉　３２・５２
又太郎　３２・５２
松井清九郎　２２
松井左一郎　２２
松井三之助　２２
松井十左衛門　２２
松井庄太郎　１０３
松岡雨月　１１０
松岡喜六　１４０
松岡佐吉　６５・８２・９０・１０５・１３２
松岡忠平　２１６
松方参議　４８
松木晩翠　１０１
松田熊次郎　１８
松田七五郎　１８・１９
松田清蔵　１１５
松田存　２２２
松田宝月　１６７
松田正喜　１５５・１５７
松田雄吉　１８５
松田良知　１４２
松田（渡辺）若子　１９６
松平加賀守（松平賀州）　１９・２０
松平伯爵家　１４３
松平康荘　１１５
松平頼寿　４８
馬糞勝治　１４０
馬糞富四夫　１６８
松野奏風　１１６
松林勘蔵　２２
松林錦之助　２２
松林源三郎（源太郎）　２２
松林小三郎　２２・２９・３５・３６・４６
松林庄三郎　２５
松林千左衛門　２２・２９
松林千助　３９
松林常太郎　５１・５２
松本敦　２２２
松本亀松　１３４

松本金太郎　４０・５４・８０・９７・１０２・１０４・１１４・１１７・１１９・１２０・２０７・２１３・２１９
松本家　１４５
松本謙三　１１７・１２２・１３６・１３７・１３９・１５０・１５１・１５２・１５８・１６１・１６２・１６４・１６５・１６６・１６７・１７２・１８２・１８３・２２０
松本重敏　２０８
松本淳（惇）　１５２・１６４
松本忠宏　１６４
松本長　２３・４０・８７・９７・１０６・１１４・１１７・１１９・１２０・１２２・１２９・１３４・１３８・１３９・１４０・１５３・２１９
松本博　１９６
松本正之　１８５
松本三都正　１６
松本弥八郎　２３・４０
松本豊　２０９
的場与一　１８５
丸島屋善左衛門　２６
丸谷他計之　１５２
三須清志　１１８
三須錦吾（幸正影）　２８・５４・１０４・１６２
三須家　６１・１２４・１６４
三須悟郎（五郎・祥光・正寿）　２８・１０４
三須丈助　２８
三須清四郎　２８・３９・５４
三須清之助　２７・２８・２１７
三須專次郎　２８
三須平左衛門　２８
三須平司　１０４・１１８
水野　４２
水野小与吉　２６
水野太右衛門　９０
水野与次郎（与二郎）　２６・３５・５４・５５
御園慎一郎　１４０
箕谷九六　５１・５２・２０９
三田村定形　５２・５３・２０９
三井　１０２
三清武規　９６
密田良二　１１・１４・１４１・１７７・１７８・２１９
南修　１９８
巳野喜勝　１００

巳野（蓑）喜松　４６・４７・１５５
巳野起松　１１９
巳野松五郎　２１４
美濃屋長作　２６
宮井喜六　８３
宮川七郎兵衛　１９
宮川（屋）宝次郎　１２・２５
三宅乙九郎　２１
三宅右近　２１
三宅三平　２１
三宅庄市（正信。藤九郎家七世）　２１・４２・４３・４４・４７・４８・５４・１０８・２０８・２１０・２１３・２１７
三宅庄平　３９
三宅惣三郎　２１・３２
三宅惣三郎（初世。猪三郎）　２１
三宅惣三郎安武（二世）　２１
三宅惣三郎喜祐（三世）　２１
三宅惣三郎祐之（四世）　２１
三宅惣三郎喜之（五世）　２１
三宅惣三郎信之（六世）　２１・１０８
三宅藤九郎　２１・３２
三宅藤九郎（初世）　２１
三宅藤九郎（二世）　２１
三宅藤九郎喜納（三世）　２１・３２
三宅藤九郎納正（四世）　２１
三宅藤九郎正之（五世）　２１・３３
三宅藤九郎正尚（六世）　２１・２４
三宅藤九郎（九世）　２１・３２・１０８・１２３
三宅藤次郎　２１
三宅襄　１５９・１６０・１６２・１６３
三宅みね　２１
三宅雪嶺　７７
宮下与吉　１５７
宮野伍朔　１４６・１５２・１６７・１６８・１７３・１７８
宮保屋平吉　２７
宮増純三　２９
宮増豊好（石浦他吉・石浦通宏）　２８・２９・２１８
宮増豊好（十四世権九郎・小太郎）　１０８
宮村保久　６０・９０・１３１
宮本又久　１５

麦谷暁夫　１９７
麦谷清一郎　１８０・１８５・１９１・１９５・１９７
麦谷万次郎　１９７
向山晁水　１１２
武藤校長　１４０
村井清貞　１０９
村井美智子　１９６
村上敬三（坡中堂）　１４・４１・１１４・１１９・１２０・１３０・２０１・２１０・２１６・２１８
村田長通（長道）　５１・５２・２０９
村松定孝　２１９
命尾寿八（友太郎）　１２０
命尾寿六　９３・１００・１０１・１１９・１２０
明治天皇　３８・４２・４４・４７・５２・１０２・１０５・１１１
毛利都生夫　１３２
最上屋八兵衛　２９
茂吉　２６
茂吉郎　２６
茂作　５１
茂太郎　２８
黙蛙（石橋忍月）　７５
元一　５１・５２
本川藤由　１８５
元吉　２９
茂八郎　３３
森茂好　１４３・１５２・１６２・１６４・１８３・２２０
森藤右衛門　５６
森靖久佐（安久）　１３１・１５２・１６８・１７３・１９０
森川荘吉　１４２・１４９
森川屋半治郎　３２
森田竹男　１３１
森田宗善　１９
森田屋市右衛門　２９
森田屋徳治　３２
森本登喜　４２
諸橋　４１・２００・２１４
諸橋何次郎（四世権之進）　２５
諸橋喜大夫（市十郎）　２５
諸橋権之進　１０・１２・１３・２４・２５・３５・３９・４０・５３・５５・８７・１２１
諸橋権之進（五世。池田屋長次）　２５
諸橋権之進（六世。堀長治）　２５

諸橋権之進（七世）　２５
諸橋権之進甚吉（八世。安信）　２５
諸橋権之進信種（九世）　２５
諸橋甚吉　２４・２５
諸橋鍋吉　２４
弥吉郎　２８
矢郷由香子　１９７
弥三右衛門　２６
安井吉平　５１・２０９
安井三治　６０・９０・９１・１０５・１３１・２１９
安江吉平　５５
安江豊吉　１０５
安江与吉　１６８
保次郎　３１
保田完三　１００
安田　１２４・１２５
安田栄松　１８５
安田善次郎（悦堂）　１２６・１２８・２１８
安田善之助　１１７・２１８
安高保太郎　８２
安福建雄　１６７
安福春雄　１７９
八十助　２６
矢田八太郎　９９
柳川　２０４
柳川勝永　２０４
柳川喜右衛門　２０４
柳川喜十郎（全作）　２０４
柳川全作（勝弥）　１３・２４・２６・４０・５４・２０４
柳川全之助　１３・２４・２６・２０４
柳川全平　３９
柳川宗右衛門　２０４
柳川惣三郎　２０４
柳川常次郎　２４・２６
柳川勇三郎　２０４
柳沢澄　１４３
柳沢英樹　３９・４４・８０・２０６・２１３
矢野正吉　４０・１０３
弥八郎　２６
弥兵衛　３２

藪俊彦　１６・１８０・１８５・１９１・１９２・１９３・１９５・１９６・１９９
弥平次　５２
弥六　２６
山県有朋（参議）　４８・１０３・１０５
山岸淑子　１９８
山崎一道　１０４
山崎有一郎　２０８
山崎屋卯兵衛　２８
山崎屋久次郎　３１
山下長造　１３１
山階宮晃親王　７２
山田有近　１１９
山田覚之（久）右衛門　１９
山田金（喜）三郎　２３
山田謙次　９３
山田佐左衛門　１９
山田参議　４８
山田潤太郎　１４９
山田専次郎　３６
山田（吉池）太佐久　１３１・１３６・１４２・１４６・１５２・１６７・１６８・１７３・１７６・１８０・１８５・１８７・１９０・１９１・１９２・１９４・１９６・２０４・２２０・２２２
山田他三郎　１９
山田守次郎　２２
山本東　２１３
山本五十六　１４９
山本和雄　１９７
山本吉次　１８５
山本恒三郎　１９
山本作兵衛　１９
山本佐兵衛　１９
山本重太郎　１９
山本甚右衛門　１９
山本静子　２２０
山本東次郎　１０５・１０８・１３５・１４９・１５６
山本東次郎（二十二世。東）　１０８
山本東次郎（二十三世。則忠）　１０８
山本東次郎（二十四世。則重）　１４９
山森青硯（専吉）　１２・１４・３１・３９・５３・５９・９３・１００・１０２・１３９・１４２・１７７・１８１・２０１・２０２・２０４・２０５・２０６・２０９・２１０・２１１・２１８・２１９・２２２
山脇源介　２１・８１・

山脇元清　１０７・１０８・２１３
山脇元照　１０７
鎗屋九右衛門　２６
湯浅渓吉（敬吉）　２８・３５・５４・５５・２１７・２１８
湯浅（中斎屋）平次（新九郎）　２８・３５・３９・１０９・２０５・２１７・２１８
湯浅勇三（英吉・勇蔵・観世新三郎）　５１・５２・６９・７０・８３・９０・９１・１０５・１０６・１０８・１１１・１１２・１３１・２０１・２１７
湯浅米吉　２８
勇吉　３０
与一（三良左衛門）　４９・５１
陽吉　１３８
横井春野　２０１
横山章　８３・８４・９８・９９・１０５・１０９・１１０・１１６・１２１・１３０
横山公長　１２３
横山家　５９・６０・１０１・１１１・１１２・１１４・１２５
横山俊二郎　１０５
横山杣人　２１８
横山隆興　８３・８４・９３・９４・９９・１０２・１０５・１０８・１０９・１１０・１１２・１１６・１３０・２１８
横山隆玄　１５４
横山隆俊（鶴処）　８３・８４・９３・９８・１０２・１０５・１０８・１０９・１１０・１１５・１１６・１２１・１３０・１３１・１４０
横山隆主　８４
横山隆平（横山男爵）　６７・６８・８３・８４・９３・９４・９６・１０２・１１６・１１９・２１６
横山隆良　１４０
横山藤二郎　１９０
横山長知（大膳）　８３
横山政和　３７・２０６
与三郎　２６
吉池（山田）太佐久　１３１・１４２・１４６・１５２・１６８
吉川保見　２１６
吉倉惣左　８４・９３・１０５・１１５
吉倉惣太　５６
吉田一郎　１６７
吉田圭蔵　１７７
吉田茂信　５１
吉田次三郎　１０７・１１８・１３１
吉田彰一　１４・１１８・１５５・１５６・１５７・１６０・１６１・１７３・２２０・２２１
吉田清五郎　５１・５２・５４
吉田清三郎　５１・５２・５４

吉田長敬　２１８
吉田魯洋　１３７・１４３・１４５
吉積華子　３２
吉野晴夫　１８０・１８５・１９７
吉野徳三郎　８７
吉日万次郎　２５
与三太郎　２６
与三吉　３１
与八郎　２６
与兵衛　２６
与平次　３２
米沢喜六　３３
米松　３２・４９
米村吉太郎　１２１・１３０
米村幸平　５１
鎧屋重次郎　２７
理吉　２６
リチャード・マッキンノン　１８２
理助　２６
立助　２６
龍之助　３１
良吉　３２
良次郎　２６
了従　９９・１００・２１５
緑之助　５７
六次郎　３１
和歌太夫　６４
若林喜三郎　２００
若林喜兵衛　９９
若林屋安左衛門　２６
若林屋金右衛門　１２
和吉　５２
脇田直久　５１
鷲田　２１１
鷲田市十郎　２６・２７
鷲田全五郎　２６
鷲田直作（百太郎）　２６・２７・５１・５２
鷲田猶作　２７・８３・９０・９１・１３１・１６１・２１０
鷲田和三郎　２６
和田貞雄　１４０

和田文次郎　１４
渡辺麗　１７３
渡辺荀之助（筍）　１３１・１４６・１５２・１５５・１５８・１６１・１６７・１６８・１７０・１７２・１７３・１７５・１７６・１８３・１９０・２２０・２２１
渡部成三　６０・１０７・１３１・１４２
渡辺他賀男　１６・１９６
渡辺他吉　８９・９１・１５９・１７３
渡辺太刀菊　１５４
渡辺辰五郎　２５
渡辺正松　８９・１０５・１７３
渡辺幽谷　１０５
渡辺容之助　１６・９１・１６５・１６７・１６８・１７３・１７５・１８０・１８４・１８５・１８６・１８７・１９０・１９４・１９５・１９６・１９８・１９９・２１８・２２０・２２１・２２２
綿屋常蔵　２７
和兵衛　３３
和平次　５１・５２・５６
割沢善次郎　１４１

附表　金沢能楽会の百年略年表

●廃藩置県。前田家東京移住（明治 4）
勧業博物館・尾山神社に能舞台（明治 11）○
●旧御手役者・町役者死没，上京（明 10 年代）
安江八幡神社舞台開き（明 20 頃）○
●今様能狂言の流行（明 20 年代）
石川県能楽会設立（明 26）○
●日清戦争（明 27）
佐野舞台建設（明 33）○
金沢能楽会設立（明 34）○
佐野吉之助，宝生九郎入門（明 35）○
●日露戦争（明 37）
東京で前田家行幸啓能（明 43）○
金沢で『能楽時報』創刊（明 44）○
●明治天皇諒闇により定例能休会（大 1）
●第一世代相次いで没す（大正期）
宝生重英家元を相続，金沢に来演（大 6）○
佐野勝秀，吉之助を襲名（大 10）○
●関東大震災（大 12）
●佐野舞台老朽化（大正末）
●大正天皇諒闇により定例能休会（昭 1）
金沢能楽堂舞台開き（昭 7）○
佐野吉之助，「道成寺」（昭 8）○
宝生紫雪 75 回忌追善能（昭 12）○
●戦争激化により定例能休会（昭 20）
金沢で『加越能楽』創刊（昭 24）○
加賀宝生を金沢市文化財に指定（昭 25）○
金沢能楽会創立 50 周年記念能（昭 27）○
●二世佐野吉之助没（昭 37）
北陸中日能始まる（昭 38）○
石川県立能楽文化会館舞台開き（昭 47）○
北国宝生能始まる（昭 53）○
金沢能楽会に金沢市文化賞（昭 55）○
海外公演・薪能の流行（昭 50・60 年代）○
●佐野正治没（昭 62）
県民移動能・観能の夕べ始まる（平 2・3）○
金沢能楽会百周年記念事業（平 12・13）○